



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50

始



特220
370



跡見花蹊女史述

の
道

非常時體制版



凡 例

- 一、本書は我國女子教育の先輩にして、學徳一世に高かりし跡見花蹊女史が、現代女性の教訓として口述せられたものを輯録したものである。
- 一、由來花蹊女史は大なる孝道のため、初めより清高なる獨身生活を送られ、然かも不言實行の人であつたから、その多からざる語も、女史の實歴・事蹟等に對照して、言外の警訓興趣あることが發見せられるのである。
- 一、本書は花蹊女史が多年に亘つて口述せられたものであるから、その原稿の選擇校正等に至るまで、その責は悉く編者にある。
- 一、終りに一般女性のため、この談話を提供し、且つ出版に供せられたことを讀者と共に感謝す。

編 者 識

女の道 目次

第一編 處女の卷

嫁入前の心得 一

嫁入前の空想と其の結果 一

犠牲になる覺悟が肝要 二

古來の美風に倣ひたし 三

禮儀をば尊重したし 三

禮儀は自他を尊重す 四

今日の紳士淑女と禮儀 四

物品よりは眞情 四

時々の儀式は尊重したし 五

髪を結ふは女の身嗜み 六

髪は一絲亂れず 七

髪を丁寧な結ぶ習慣 七

結髪は女の身嗜み 八

髪が清いと夏も涼しい……………九

習字と手紙の書き方……………一〇

文字は精神を表現す……………一〇

文字にならぬ文字……………一一

見合よりは筆蹟……………一二

平生が大切……………一三

手紙は毛筆で書きたい……………一四

手紙を認むる注意……………一四

何よりも晴れのこと……………一五

訪問及び迎客に就いて……………一五

私の執つて居る方針……………一六

感心して居る奥様……………一六

客を迎へる第一の心得……………一七

客を迎へる第二の心得……………一七

訪問者に注意す……………一八

機微を察したし……………一八

悪い癖と善い習慣……………一九

悪い癖のいろいろ……………一九

善い習慣のいろいろ……………二二

成功の結婚と失敗の結婚……………二三

縁談も汲泉會で分る……………二三

結婚前の聞合と成績……………二三

雙方の好い註文……………二三

虚榮の犠牲になつた結婚……………二四

順境に慣れた失敗……………二五

將來の見込が大切……………二六

近來珍らしい美談……………二六

見合は入念なるべし……………二七

模範的自由結婚……………二八

見合は効力あるやう……………二九

失敗に歸した見合……………三〇

獨身生活は如何……………三一

已むなき獨身生活……………三一

獨身生活は未遂げす……………三二

獨身生活と結婚生活……………三三

尼僧生活は如何……………三四

第二編 主婦の巻

處女諸君に望む……………三

若婦人の警訓……………三七

誤れる結婚の考へ……………三七

こんな覺悟を要す……………三八

活動と養老とに注意せよ……………三八

羞恥心と女の今昔……………三九

夫婦間にも禮あり……………四〇

夫の愛を失はぬ所以……………四一

妻の出迎は肝心也……………四二

愛がないと永續しない……………四三

清潔整理が肝心……………四三

茶の湯の修練を要す……………四四

眞の交際と禮儀……………四五

師弟の間を温めたり……………四六

父母の嚴誠を要す……………四七

嫁と姑との和合……………四八

媒酌人などの誤見……………四八

姑に盲従する覺悟……………四八

舅姑も我慢を要す……………四九

赤い心に白い障……………五〇

夫の優しい慰めの言葉……………五一

世の中を辨へたり……………五二

姑と嫁とは繼母子の知し……………五三

嫁姑の調和は主人の努力……………五四

健全なる家政の執り方……………五五

夫婦共稼ぎを勵む……………五五

手を空しうする勿れ……………五五

今は大に働くべき時也……………五六

働くことは幾らもある……………五七

新年を區切に着實に……………五八

言語道斷の仕打……………五八

奢侈ほど不便である……………五九

無理は女が本……………六〇

社會の悪俗を改めたり……………六一

家政の健全は女の心懸……………六一

女は裁縫を尙ふ……………六二

料理と家庭の和合……………六三

家庭教育と母親の賢愚……………六四

子供は母親次第也……………六五

子供の健實と教育……………六六

我が校の精神も同じ……………六七

床しい若婦人……………六八

一家の平和は貧富に拘らず……………六九

婿取の娘の好い模範……………七〇

両親へ親切な仕向……………七一

氣の利かせ所……………七二

いろく優しい若婦人……………七三

言葉と身振……………七四

言葉は人格の表現……………七五

最も聞苦しい嫌な言葉……………七六

言葉でも里が判る……………七七

毫も訓練のない言葉遣……………七八

並ばせ言葉と奥様……………七九

坐り場所にも注意せよ……………七〇

昔の婦人に鑑みよ……………七一

坐り方と歩き方……………七二

愛嬌と家庭……………七三

平和な家庭……………七四

笑ふ門には福來る……………七五

笑へばホステリーに罹らず……………七六

笑ひ乍ら暴風雨と戦ふ……………七七

愛嬌は美人を造る……………七八

子供の好くので分る……………七九

交際の秘訣も愛嬌に在り……………八〇

心配も苦にならず……………八一

老人も大に注意したし……………八二

今後の母に望む……………八三

學校は家庭次第也……………八四

家庭に於ける躰け……………八五

順境を的にする勿れ……………八六

幼時より躰けよ……………八七

今後の母たらん方へ……………九二

緊要なる家庭訓……………九三

明治維新當時を偲ぶ……………九三

母たらん方に望む……………九四

現代の子女教育……………九五

子女教育の根柢……………九五

冥利を恐れたし……………九六

今日の風潮は如何……………九七

子女と母の修養……………九七

感心な未亡人……………九八

良人の遺業を完成す……………九八

二十五から寡婦で暮す……………九九

利慾の境を解脱した婦人……………九九

幼い時から面白い手紙を書く……………一〇〇

他方本願を信じて疑はぬ……………一〇〇

肺病に罹つても悲観せぬ……………一〇一

女中と二人で二間の家……………一〇二

面白い寄せ書きの屏風……………一〇三

オ々から書を頼まれて困る……………一〇三

未亡人でない可亡人なり……………一〇四

嫁に遣る迄……………一〇五

社會の複雑と母の責任……………一〇五

鞏固なる意志と圓滿なる感情……………一〇五

現代の娘さんと家庭の實務……………一〇六

現代の若婦人の理想……………一〇七

何時でも差支ないやうになる……………一〇八

家を齊へるを主とす……………一〇九

時代と親の責任……………一一〇

流行と一家の經濟……………一一一

流行の變遷と一家の經濟……………一一一

昔の禮服は規律 しい……………一一二

禮服を是の如く定めよ……………一一三

被衣の復興を望む……………一一四

雜節句と家庭……………一一五

雜節句の由來……………一一五

雜節句と皇室……………一一五

第三編 實驗の卷

公卿の雜節句 二六
 宮中の御儀式 二七
 武家の雜節句 二八
 經驗より得たる教訓 二九
 父母の言が身に染む 二九
 父母に孝せんこのみ 三〇
 世の物騒に驚かす 三〇
 六十年の教育生活 三一
 教育は世態に應ず 三一
 祖先崇拜を本とす 三三
 今日の流れ弊と婦人の不幸 三三
 目的は良妻賢母 三四
 身體の健康は本也 三六
 勇猛精進せよ 三六
 幼時のお正月 三七
 生れたときの跡見家 三七

先生兼小使 二六
 正月の嘉例 二九
 看板の揮毫 三〇
 忘れぬ教訓 三一
 父の教訓 三一
 母の教訓 三一
 新春を迎へて 三三
 四十年來變りなき元旦 三三
 若い時の嬉しい正月 三三
 恐ろしかった正月 三四
 書き初めと女の書 三五
 私の書道観 三六
 花に對して 三七
 想起す天王寺邊の花 三七
 うろついて人に怪まる 三八
 路に迷つて月を踏む 三八
 私の花見と其の心地 三九
 花も人の如く違ふ 四〇

思出のまゝ……………一四〇

私の祖先と覚悟……………一四〇

勉めて習つたり教つたり……………一四二

唯跡見家の再興のみ……………一四三

生徒と先生……………一四三

東京に出て驚く……………一四四

書齋よりか教育にて……………一四四

跡見女學校の經營……………一四五

お世話した高貴の方々……………一四六

開校式と三女王殿下……………一四六

書齋修業の話……………一四八

好きこそ物の上手なれ……………一四九

書は心の印也……………一四九

王羲之の法帖に依れよ……………一五〇

私の繪畫は何流か……………一五一

私の無病長壽法……………一五二

必ず遣り通す覚悟で……………一五二

毎朝祖先の墓地へ……………一五三

平常の食事と飲料……………一五三

靜座法のお蔭で寒さ知らず……………一五四

若い時は十六貫の體量……………一五五

愉快に其の日其の日を……………一五六

御前揮毫の光榮……………一五七

日々の務め……………一五八

朝の務と樂……………一五八

夜の務と樂……………一五九

いろくの養生……………一六〇

書齋や教育が何より樂み……………一六一

間斷なき教育事業……………一六一

子はなくも教への孫は多い……………一六二

活動はれ快樂……………一六三

私の幸福は清き活動なり……………一六四

暑中の世話……………一六五

避暑の要なし……………一六五

暑中の一日間……………一六六

隠れたる用事あり……………一六七

第四編 時局の巻

朝夕の禮拜……………一六

心を主とす……………一六

今後の日本婦人……………一七〇

婦人は齊家を主とす……………一七〇

財政の整理を急とす……………一七一

現代婦人の弊は是れ……………一七一

婦人の奢侈と經濟戰の敗北……………一七二

中流以上の婦人に望む……………一七三

内職して輸出したし……………一七四

内職すれば儉約となる……………一七五

現代の婦人と其の責任……………一七六

世界の大戦亂と平素の準備……………一七六

婦人の責任と育児……………一七七

今の婦人と國產獎勵……………一七八

上流婦人の手内職と質素勤勉……………一七九

勤勞是れ國利民福……………一八二

昔の女と新しい女……………一八二

維新當時の江戸風俗……………一八二

當時の若婦人の服裝……………一八三

殺風景な時代……………一八四

當時の新しい女……………一八五

眞の女の道……………一八六

新しい女を評す……………一八八

新しい女は流行病……………一八八

西洋の思想と日本魂……………一八八

夫唱婦隨は自然也……………一八九

貞淑は必ず夫を感じしむ……………一九〇

若婦人に注意……………一九一

理想の御女性……………一九二

私共の此上なき光榮……………一九二

我が女學校への思召……………一九三

御言葉に出し給はず……………一九四

人を視給ふこと明也……………一九四

正直を好ませ給ふ……………一九五

勤儉力行を尙ぶ 二二二

餘計のものは廢したし 二二三

國運の發展に添ひたし 二二三

利己的の現代と私の喜悅 二二四

世界統一の機運と國民の現狀 二二四

肉食は亡國の食物也 二二五

獨逸の強と我が國の現狀 二二六

折に觸れたる(和歌) 二二九

終

御幸の折の御心配 一九五

御痛心の儘崩じ給ふ 一九六

嗚呼女王殿下 一九七

賢明なる季子殿下 一九七

遠足がも樂み 一九八

御學業は何れも御得意 一九九

悲みの極み 二〇〇

乃木將軍夫妻を偲ぶ 二〇〇

乃木將軍夫妻の自殺 二〇〇

乃木將軍と教育事業 二〇三

乃木夫人の死と今日の婦人 二〇五

貞順の美風を保存したし 二〇七

御大禮後の婦人 二〇九

御大禮が革新の機 二〇九

一層の努力を要す 二一〇

世界の大戦と日本婦人 二一〇

世界の大戦と學校家庭 二一〇

獨逸の強い理由 二一一

女の道

跡見花蹊女史述

第一編 處女の卷

嫁入前の心得

嫁入前の空想と其の結果

嫁入前の心得

現今の若い婦人の傾向を見ますに、随分いろいろな誤つた考へや、不心得のことが、少からずあるやうであります。先づ女子の最大本分としては、妻となり、母となることにあるのですが、儲妻になるに就いては、嫁入すると、新家庭を作るのであるから、非常に面白いことがあり、安樂や我儘の出来るやうに、宛ら芝居

の飯事でもするかの如く、心得て居るものがあるやうであります。加之嫁ぐにも註文が八釜しく、夫は學士以上で欲しいとか、相當の財産がどうの、姑小姑がない家だのと、無暗に自分一人の安逸や快樂を貪ること計り、考へて居るやうであります。其れが爲に往々ひねくれて、獨身主義を唱へたり、折角嫁入しても、遂に家族と衝突して、破鏡の憂目を見たり、或は家庭の平和を缺いで、舅姑と別居したりする破目に立ち至るものが、珍らしくはございませぬ。

犠牲になる覺悟が肝要

此等は要するに、最初から其の心懸を誤つた爲に外ありませぬ。所謂得手勝手な欲望を振翳して、家庭の主婦には、如何なる責任のあるものやら、又責任を脊負つて、立派に幸福にしようなどと云ふ根本をなす、大切な觀念が足りないからであります。されば嫁ぐには、先づ何處迄も犠牲になる覺悟が肝要で、自分の責任の重大なるを悟り、勞苦を決心せねばならぬ。斯うして強固な意志さへあつたなら、勞苦

も却て勞苦とならず、知らず識らずの間に、自分の安樂も産み來り、平和で圓滿な立派な家庭を作ることが出来るのであります。

古來の美風に倣ひたし

偕近世物質的文明の進歩するに隨ひ、國民の美風の頽れて行くのは、誠に歎かましいことでもあります。昔は妻を迎へて、始めて家の土臺が固つたと喜んで居たのに今は土臺が固まらなければ、妻を迎へることが出来ない。又昔は糟糠の妻などと申しまして、素寒貧時代に嫁し、其の家を段々榮えさすのを、婦人の樂みとし、且つ婦人の誇りとしたものですが、今は成るべく骨が折れず、お金が澤山あり、女中でも使つて、物見遊山の贅澤が出来る家でない嫁がない、而も其れが本人計りでなく親達まで、其れを望んで居る風ですから、どうして一家の主婦となつた後、家族の運命を左右する重大な責任が盡されませう。

此等は總て、最初に於て、主婦としての心懸や用意が缺けて居る爲の結果であり

まして、殊に女學校を出た計りの若い女子達には、有勝の風潮でありますから、吳も、嫁ぐ前に十分の修養と覺悟をすることが、肝要であります。

禮儀をば尊重したし

禮儀は自他を尊重す

御承知でもありませんが、禮儀は人間に具有する至誠眞情の表現とも云ふべきもので、人獸の別は、全く之が有無で定まると云ふ位のものであります。禮儀あればこそ、社會に規律も立ち、秩序も出來、安穩に暮すことが出來ます。禮儀は、言葉を換へて云へば、自他敬愛の形に表はれたものとも思はれますが、婦女子に取つては、特に護身の具ともなります。人を尊重し、自己を輕しめぬには、必ず禮儀を要するのであります。

今日の紳士淑女と禮儀

然るに、今日の紳士淑女とも云はるゝ方は、如何と云ふに、勿論一様には申されませんが、概して禮儀を顧みない傾向があります。世間からは貴婦人とか、令婦人とか呼ばれて居ながらも、恩人や知己に對して、禮を缺く者もあります。其れも實際の病氣とか、又は已むを得ない不時の事情でもあるのならば、詮方もありませんが、新調の美服がないとか、手土産を持つて行かなければならぬからなどの理由の下に、禮を缺くと云ふことは、甚だ面白くないことであります。斯様に人心が輕佻浮薄に流れましては、世界に雄視し、東洋の盟主權を握るなどのことは、到底出來ることではありますまい。

物品よりは眞情

人には身分相應と云ふものがあります。美服を着なければ、知己を訪ねて舊交を温めることが出來ぬとは、何たる淺ましいことでありませう。物品を贈る外に、恩人に禮を陳べる途を知らぬとは、何たる汚らはしい心でありませう。國運發展の好

時機なるをも忘れて、徒に虚榮虚飾に流れ、最も大切な禮に違ふよりも、美衣は着すども、土産は持たずとも、護謨輪の車、自働車に乗らずとも、一年に一二度位は、知己や恩人を訪うて、互に其の消息を語り合つて、舊情を温めるやうにするのは、人間の爲すべき道でありませう。

時々の儀式は尊重したし

儀式の事なども、昔に比較しますと、非常に省略されて参りました。勿論繁劇多忙の世でありますから、無意味の形式に拘泥して、無益に時を費す必要はありませんが、慶弔の場合とか、新年歳末、中元の禮は、何處迄も、尊重したいと思ひます。其の虚禮であるや否やは、至誠真情の籠るか籠らぬかで分れるのであるから、心せねばなりません。

髪を結ふは女の身嗜み

髪は一絲亂れずに

女は毛髪の亂れたのを失禮だとして、昔から嚴重に戒めてあります。女が髪を理すと云ふことは、身嗜みの一つでありますから、些細なことのやうではあります。少女時代から一絲亂れずと心懸けて、髪を綺麗に取り上げてありますと、其の人格其の家庭の嚴格さが想ひやられて、何となく床しい感じのするものでございます。けれど、髪に櫛の跡の通つて居ない、後れ毛だらけの亂れたのは、一種の臭氣があつて、不潔に思はれるものであります。暑い時などは、殊に其の感じの深いものでありますから、夏は特に注意して髪を洗ひ、清潔にするやうに心懸けることが肝要であります。

髪を丁寧な結ふ習慣

昔の少女は唐人髻とか桃輪とか云ふやうな、随分手数のかゝつた髪計り結つたものですが、それでももう十四五にもなりますと、自分に取上げて居たものであります。今の少女は大概お下髪か束髪でございまして、日本髪のやうにむづかしい手数もかゝりませんから、もう女學校にでも入るやうな年頃になりますと、自分で自由に取上げることが出来ますから、朝起きましたならば、第一に髪を取上げて一絲も亂さぬといふやうに取りすまして居るやうに、習慣を作ることが必要であります。

結髪は女の身嗜み

女が髪を自ら取り上げることは、他の化粧と同じく、女の身嗜みでありますから同じ束髪に致しましても、髪を張るとか髻を出すとか、それ〴〵自分の顔に似合つたやうに、自分で形を自由にすることが出来て、至極便利でありますから、毎朝綺麗に取上げて置きますと、來客などの時、お待たせするやうなこともなく、何時でも取りすまして應接が出来ますから、來客にも悪い感じを與へることもなく、自分も

何となく愉快に感ずるものであります。旅行など致します時などは、髪を自分で取上げることが、何れ程便利であり、心持の好いものであるか知れません。

髪が清いご夏も涼しい

盛夏の暑い時などは、殊更ら早く起きて、第一に髪を綺麗に取上げて、衣紋を正しく、きちんとして居ますと、だらしない亂れ髪で、不行儀な眞似をしてゐるのよりは、却つて涼しいものであります。自分が涼しく思ふばかりでなく、人にも涼しげに見えるものでありますから、暑い暑いといつて、自墮落な容體をすることなく、何處までも清き婦女の品性を失はぬやう、取りすましたるすがくしい姿でありたいと思ひます。それには高價な白粉を塗る化粧よりは、女として大切な髪を清潔にして、毎朝一絲亂れぬやうに取上げることが、最も肝要なことであると思ひます。

習字と手紙の書き方

文字は精神を表現す

近頃高等女學校の卒業生などと申しましても、其の筆蹟や手紙を見ますと、どうも一人前とは、受けとれないのが多うございます。昔は女子教育も發達しませんでしたから、學問のない人が、澤山にありました。それでも筆蹟は、只今の人達よりも立派でした。元來文字と云ふものは、昔から心印とまで申されまして、文字を書くこと云ふことは、自分の心の印を捺したやうなものとなつて居りました。ですから、文字を書かせて見れば、其の人の精神は、すつかり分るので、眞面目な人であるか、若くは亂雑な縮りのない人であるか、或は貞操を守る人か否かと云ふこと迄も、大體分ります。私は何時も生徒に字を書くときには、恰も至尊に對する如き心持で、息もつかずに書かねばならぬ、他の事など考へながら書くなと云ふことは

勿論いけないと申し聞けて居ります。下手上手は據るありませんが、精神を籠めて書くこと、さもないとは雲泥の差があります。

文字にならぬ文字

所が此の頃の女學生や、若い夫人たちの書かれたものを見ますと、假名などでも只、うにやらくとして居るので、文字になつて居りません。少しも精神の籠つた跡などは見られません。大方假名などは、うにやらくと書けば宜しいものと、心得て居られるのかも知りませんが、決してそんなものではありません。假名を書くにも、矢張定る所はきちんと定らねば、文字にはなりませんので、漢字を書くと同様、至尊の前に出たやうな心を失つてはならないのです。

見合よりは筆蹟

私は此の節、人に向つて、こんなことを申して居ります。それは嫁を貰ふには、先づ其の人の手紙を貰つて、其れに因つて判斷するのが、一番宜しい、決して見合

なごをする必要はないと迄申しますが、或程度までは、是れで能く分ります。唯一度の見合よりは、幾ら確たか分りません。書は姓名を記すに足るなご申すことは英雄豪傑なごの申すことで、偉い人は其れでも宜しいでせうが、我々凡人には、そんなことは適用出来ません。殊に女が、そんなことを申して居るなごは間違つたことで、筆蹟の美しいと云ふことは、内心の美しさが現はれて、實に奥床しいものでございます。

平生が大切

併し字と云ふものは、急に美しくなれないもので、どうしても若い時代から修養せねばなりません。近來は三ヶ月速成なご申すやうなことも聞きますが、あれは筆法とか運筆とかを會得する迄で、自由に立派な文字を書くに云ふ處へは、遠く及びません。何と申しても學校時代から、一生懸命に習つたのには及びません。それから又改まつた時だけ、立派に書かうとしても、其れは駄目です。平生習字をする

ときでも、一寸手紙を書くときでも、荷も筆をとり、紙に向つたならば、至尊のますが如き心持で居ることが大切です。何事でも精神の籠ると云ふものは、恐ろしいもので、一生懸命に習字をしますと、其の力は樺のやうな堅い木で造つた机でも、紙を通して回みますさうで、よく習字をした人の机は、後で削つて見れば、直ぐ分ると云ふことです。

手紙は毛筆で書きたい

習字に次いで、手紙ですが、近來は何でも簡便と云ふことで、鉛筆で書いたりペンで書いたり致しますけれども、私の學校では、一切そんなことは禁じてあります。受取のやうなものなら、何でも構ひませんが、女子の手紙には、矢張毛筆で美しく書いたものが、相應しいと思ひます。手紙など云ふものは、ほんの自分と向ふの人だけのものであります。其れが、どう云ふ機會で、人の目にかゝらぬとも限りませんし、又何時迄残るか分らないものでありますから、假ひ急ぎの場合にで

も、出来るだけ氣を付けて、立派に丁寧を書くこと云ふことを忘れてはなりません。

手紙を認むる注意

其れから手紙の文言ですが、十分先方を尊敬して書くことが大切で、其の人の身分に相當と云ふよりも、一段敬つて書く心持でなければなりません。用語なども成るべく、同じならば美しい言葉を選んで、誰れに見られても、恥かしくない云ふ風でありたいものです。文體は時勢に伴れて變つて行くものでありますから、限つて候文でなければならぬと云ふこともありませんが、手紙の書き方、形式などは、或程度まで一定の方式に依つた方が宜しいのです。

何よりも晴れのここ

凡て文字とか手紙とか云ふものは、破つて捨て、仕舞はない以上は、何人かの手に何時迄も残るものでありますから、是れ程晴れかましいものはありません。人前に琴を弾いたり、歌を唄つたりすることが、何より晴れかましいと思ふのは間違ひ

さう云ふことは、其の場限りのものであります。此れは決して其の時限りではありません。文字を書いたり、手紙を認めたりする際には、精々注意致すことは勿論平生學校で學ぶ時にも、其の心して書かねばなりません。

訪問及び迎客に就いて

私の執つて居る方針

訪問した時、よく待たされて困ると云ふやうな話もあるが、私などは未だ、そんな經驗は持ちませぬ。大抵前持つて電話なり、手紙なりで、何時何日に伺ふからと約束してあるので、先方でも豫め用意して待つて居るせいもあります。訪問されたときも、私は必ず直ぐ面會することにしてあります。其れが突然であつた場合などは、面會出来なければ、其の理由を言つてお断りしますが、面會することの出来る限りは直様、お目に掛ることにしてあります。何と云つても、餘り長いこと待た

されたり、待たしたりするのは、感心の宜いものではないと思はれます。

感心して居る奥様

私の伺ふお邸で感心して居るのは、島田三郎氏の夫人で、門人と云ふ関係もあるには相違ありませんが、つひ一度も感心せず、歸つたことはありません。何處が感心であるかと云ふと、先づ家の周囲が、きちんと整つて居ります。門を入つて玄関から床の間まで、何時行つても、少しの手落もありません。召使などの行儀作法も儼然と守られて、小ざつぱりとした扮装の夫人に接したときは、只もう心持好くなつて仕舞ひます。浦松子爵の夫人も、仲々感心なお方です。身分あるお邸の夫人としては、實に行届いたもので、朝早くから起きて、女中の氣付かぬ隅々迄掃除して、何一つ手落などありません。第一に伺候したとき、あ、宜く整頓されて居るなと思ふ事は、自然夫人の日常生活も窺はれて、何となく床しいものです。

客を迎へる第一の心得

來客を迎へる時の心得として、第一に必要なことは、眞心から饗應すと云ふことでせう。山海の珍味はなくとも、贅を盡した裝飾はなくとも、喜んで心から迎へられることが、何より一番好いのです。反對に善美を盡して饗應れた所で、相手がほんの義理一片で迎へて居るやうでは、何となく冷い心持がするものであります。併し世間には、さう參りませんものですから、其の邊は、能く能く心得て置かねばなるまいと思ひます。

客を迎へる第二の心得

第二に必要なことは、來客を手持無沙汰にさせぬことであります。此れは餘程交際慣れぬと、出來ぬことではあります。併し其れも自分の心得一つで、何もお世辭を澤山に列べずとも、其の邊は甘く行くものです。多忙なとき、又は取込のあつたときなど、突然訪問者があるとしたならば、出來る丈落付いて、相手の感心を悪くせぬやうにしたいものです。相當な理由があつて、相手を得心させて返す場合は

宜いとして、面會したならば、決して狼狽へたり、せかせかしたりする、態度を取つて欲しくないものです。

訪問者に注意す

無沙汰をして、御機嫌伺ひに訪問するのは別として、大抵は訪問の理由があるものですから、目的を明瞭にして行つて貰ひたいと思ひます、田舎の人などが訪問した時など、何の爲か少しも相手に理解されなくて、唯ぐづぐづ時間計り空費させることもありますが、交際慣れぬからと云つて、あれでも誠に困ると思ひます。

機微を察したし

場合を考へ、相手の機微を察することも、大切なことであります。前以て訪問先きと打合せした場合は兎に角、突然の場合に人を訪問したときは、相手の態度で、多忙か多忙でないかを觀察し、若し自分が居て邪魔のやうなら、一通の挨拶と目的を陳べて、直に歸つた方が宜いと思ひます。所謂氣の利かぬ人として、何時も長

居をすることは、甚だ面白くないことであります。

悪い癖と善い習慣

悪い癖のいろいろ

- 一、人の前で矢鱈に、髪や帯を撫でる癖。
- 一、欠伸を噛み殺す癖。
- 一、足をいぢる癖。此れは善い方々には勿論ない事で、こんな汚い癖はありません。上の方々は、下々の子供達は直に足をいぢるので、誠に汚いと仰せられます。實に行儀の悪い、此の上もない事です。
- 一、人の着物や持物をちろちろ眺めたり、又は引張つて見たりする癖。一寸變つた着物を着たり、新調したものを着けたりすると、珍らしさうに眺めて、まあ好い柄ですとか、何とか云つて、一々検査する癖は、若い人にも年寄にもありますが

此れは人に對して失禮です。

一、人と話しながら手巾を出して、丁寧に島田を拵へたり、壊したりする癖。別に悪いと云ふ譯でもありませんが、餘り品の好いものでもありません。

一、通りすがひに、一寸振りむく癖。

一、人と對して話をするのに、相手の人の顔を見ずに、たゞ俯いてばかり居る癖。

これは人相がわるいと云びます。

一、人を訪問して、何の用に來たのか判らず、只長居する癖。

一、人に物を借りて容易に返さぬ癖。

一、人を羨む癖。自分は遊んでばかり居て、一生懸命勉めた人が出世したり、幸福な境遇になつたりすると、無暗と羨しがつて、その人を悪く云つたり、邪魔をしたりする人が、随分世間にはありますが、甚だ悪い事です。

一、人の事を根掘り葉ほり問ふ癖。

一、人に物事を隠し立てする癖。勿論總ての人に何から何まで知らせる必要はありませんが、しかし差支へのない事は、友達の間などでは、隠さぬが宜しいのです。お互に隠したりするので、そんな誤解などが起る事もあります。

善い習慣のいろく

一、先づ朝起きて、食事までに髪を撫でつけ、衣服をきちんとして、決して蓬々した髪、取り亂した服装で食卓につかぬこと。

一、訪問者を長く待たせぬこと。人によると三十分も一時間も待たせることがありますが、前以て來るのが分つて居る客ならば尙更のこと、假ひ不意の來訪にしても髪も調へ、身なりもきちんとして居れば、直に逢ふ事が出來ます。しかし待たせるのが悪いと云うて、寢衣のまゝ飛んで出て逢ふと云ふのも、失禮な事です。何時でも人に逢つて恥かしくないと云ふ風に、用意をして置くと云ふ習慣をつけたいものです。

一、手紙の返事を直に出すこと。

一、高尚な言葉を遣ふ習慣。言葉と云ふものは、平生から使ひ慣れて居らないと、俄に綺麗な言葉は出ないもので、その爲にとんだ恥をかく事があります。先年某宮内大官の夫人が、やんごとなきお方の御前に召されて、お杯を頂戴いたされましたが、その時その夫人が、「大層よつばらひました」と申されましたさうで、非常に人々の物笑ひとなり、再びさういふ場所へ出られなくなつたと云ふ事がありました。綺麗な言葉を遣ひ過ぎたと云つて笑はれる事はありませんから、平生友達の間にも、出来るだけ善い言葉を遣ふ習慣をつけて置きたいのです。

一、人の爲た事、云うた事、凡て善意に解する習慣。

一、時間を正しく守る習慣。

一、總てを明さまにする習慣。女には一寸した事にも人前を繕ふとか、又は隠すとか云ふ癖のあるものですが、これは人に不快の感を持たせません。隠しごとなどは

どうせ後で分りますから、それより 最初から、打あけて置く方が善いのです。

成功の結婚と失敗の結婚

縁談も汲泉會で分る

卒業生の縁談の持ち上るときは、私は悦んで相談に應ずることにして居ります。此の六月（大正四年）中には、汲泉會の創立満十周年總會を開くとて、目下準備であります。此の汲泉會と申すのは、卒業生の團體で、常に母校との連絡を圖つてお互に有益なることを語り合ふと云ふ會で、女子大學の櫻楓會のやうなものであります。此の會があれば、自然誰々さんは、昨今どうして居るとか、何處にお嫁さんに行つたとか云ふことは、大概分るのであります。

結婚前の聞合と成績

お尋ねにお出でになるお方は、先づ在學中の成績は、どうであつたとか、操行は

どうであつたとか、背が高いか低いとか、丸顔か其れとも長い方かなど、無論結婚するに就いて、取調すべき条件の數々を細に、お尋ねになります。是れ迄お嫁さんになつた卒業生の實際を見ると、實に異様の感に打たれることがあります。學績品行とも優等で、其の上可なり容貌も佳かつた人が、一旦人妻となつてから、急に氣質が變ると云ふ譯でもありません。良妻たり賢母たる事能はずして、哀れ破鏡の歎に掻きくれて居るもあれば、入學以來卒業當時も成績の好くなかつたお嬢さんでも、家庭の人となつては、良妻と仰がれ、臆ては得難き賢母となつて、舅姑は勿論親戚知人から佳い嫁を貰つたと悦ばれてゐる方も随分あります。こんな風ですから、學校の成績が少し位悪いからとて、決して花嫁の資格の一部を缺損して居るは申されません。机上の空論は家庭の實際に當て嵌らぬとは、此の事なのでせう。

雙方蟲の好い注文

學校の成績はさうでも、其の生家が相當で、親戚に立派な方さへあらば、將來出

世の蔓は幾等も引張り出せると、大事の本人を他所にして、其の位置と資産とを的にして婚姻しようとする青年紳士が、随分あるやうに思はれます。又嫁の方でも同じ事で、大學を出て居るに越した事はないが、若し能る事ならば、財産のある所へ遣りたい、ならう事なら、舅姑もなく夫婦差向ひの所が結構ですなどと、随分蟲の好い註文をなさる方もあります。

虚榮の犠牲になつた結婚

某博士の令嬢が青年醫學士と婚約のあるのを振り棄て、望まるゝまゝに、某男爵嗣子某へ縁付きました所、男爵家は仲間でも評判な所で、花婿たる人は、常に花柳の巷に身を容れて、滅多に家に歸らぬほどの放埒な事が、父博士の耳に入り、結婚後二ヶ月で娘を引取られました。男爵家への輿入を、又ない光榮として、誇り顔に親戚に吹聴した手前もあり、且つ棄てた件の青年醫學士への思はくもありません。離縁はとつたが、娘の遣り場に困つて、遠く地方の知人の許に預けた、と云

ふ實例もあります。これは親々の虚榮心から、大事の娘が犠牲になつたのです。

順境に慣れた失敗

又、大會社の重役のお嬢さんで、大學を出て間もない、裸一貫の青年法學士の所へ嫁入りましたが、月收僅か五十圓なので、ごうする事も出来ません。月の半途すぎから能く喧嘩が始まりますが、其れは何時にも財政不如意が本となつて居るのであります。乳母日傘で育てた娘を、あゝまで苦勞さしては、病氣になりはしまいかどの取越苦勞から、遂に結婚後一年経つたかたゝぬに暇を取らせ、親々は更に方々へ頼み廻つて、再婚であるから、子供はあつても構はぬ、何でも金のある、所へ遣りたいとの心願叶つて、今度は先妻に死別れ一人の子供を抱へて困つて居ると云ふ、立派な實業家へ縁付かせました。當座は面白をかしく夫婦仲も善かつたやうですが、舅姑との折合が悪くて、又も一年餘りで離婚となりました。

將來の見込が大切

「鬼でも始めて見たが一番よろしい」と申します、一度ならず二度三度と替へれば變へるほど、駄目になるさうです。強ひて申すではありませんが、大學でも、其の他の學校でも、當の本人に將來の望みさへあらば、裸一貫の書生上りでも結構であります。良人なる人が段々出世するに連れて、共々に家財道具を殖して行く樂みは、又とはありませんとは、克く聽く事ですが、寔にさもあるべき事だらうと思ひます。

近來珍らしい美談

某所に有名な資産家があります。令嬢は當時十九歳の絶世の美人とあつて、降るほどの縁談の中から、選りに選り抜いて婿金としましたのは、大學法科出秀才で、學生時代に既に、高等文官試験に合格したほどの人でありましたから、卒業早々、相當の役所詰となつて、下宿住居の相變らず、書生生活を續けて居た所に見込をつけたのは、令嬢の父なる人でありました。出るには必ず自動車か馬車、其れに必ず女中附きと云つた風の育ち、學校も虎の門女學館の出身でありますから、派出な扮粧は

何時も近所の目を惹くほどでありましたが、一旦新學士の新嫁となつてからは、まるで生れ變つたやうになり、女中と云つても十六歳の小女一人を相手に、拭き掃除から靴下の破れに到るまで、自分で繕つて、決して生家へは厄介をかけぬと云ふ萬事儉約な家政の引き廻し、物見遊山は年寄つてから出来る事ゆゑ、苦い時には働くに限ると、當節の奥さんには似てもつかぬやり方なので、生家の兩親を初め、當の良人も意外であつたこの事ですが、結婚後二年ばかりで、新學士は地方の事務官に榮轉し、廳て各縣の事務官に歴任すること數年にして、今度は東京の本省詰となり今現に局長として羽振を利かして居られます。

見合は入念なるべし

私の若い頃は、見識らずの若い同志を引合して、祝言の盃をさしたものであります、今は見合と云ふものがあつて、雙方の心を聽いて見た上でなくては、決して結婚しない事になりましたが、あゝした方なら宜しいと、お互に承知しても、見

合位では、氣心が解らぬとて、二回も三回も交際をして見る親々もありません。

模範的自由結婚

私の學校の卒業生で某子爵へ縁付いた今年二十歳の新婚者があります。其の新夫人のお母さんは極めて理屈の解つたお方だけに、最初自分から、お婿さんの子爵で何度もお目にかゝつて、是れならばと見込をつけた所で、今度は婿さんを自分の宅に呼んで、娘を引合せ、帝劇や博覽會などへも案内し、歸りには料理屋で御飯をたべる事もあり、母子ともく子爵家を訪ねて、御飯を頂戴することなどがあつて、十分子爵の人格を確かめた後、今度は女中をつけて、若い同志上野あたりに時間を限つて出してやられました。それで雙方に異存がないとなつた所で、愈々結納の取交しとなつたのであるから、世の常の見合とは異つて、先づ西洋式の模範的自由結婚を、純然たる日本式に演つて大成功を遂げたものでも申しませうか。

見合は効力あるやう

一體此の見合なるものは、餘程難かしいものだと思ひます。若い同志の事でも、さう顔に孔の明くほご見られるものでありません。お互に大氣取に氣取つて居らねばならぬ時ですから、話したい事や、言ひたい事があつても、遠慮勝になるものです、此の見合と云ふものは、若し出来るならば、今申し上げました子爵夫婦の時のやうに致したいものです。それほごまでに入念に參らぬとも、先づあゝした程度に於て、見合をさせて置いたならば、後から、いろんな不平も起らぬだらうと思ひます。

失敗に歸した見合

それから今一つ、見合の事に就いて申上げて置きたい事があります。これは私の懇意な人の話ですが、精養軒や三越の見合も面白くないゆゑ、一つ當世式に帝國劇場でやつて見ようと相談が纏つて、愈々新郎新婦たるべき、若い同志を引き合せたは、無難でしたが、花嫁なる人は見事落第しました。それは輪奐の美を盡した帝

劇の舞臺を背景にした中に、今日を晴れど、着飾つた観客の女が、孰れも我れ劣らじと粹を誇つてるのですから、其の中へ女學校を出たばかりの娘を出したので、見劣りがした爲だつたのであります。昔から嫁の腰元に醜い女を擇んで、花嫁を引立たせる習慣さへありますから、此の失敗談は大に參考とすべきだと思ひます。

(大正四年二月)

獨身生活は如何

己むなき獨身生活

私の獨身生活は、人様とは違つて居りまして、跡見家を再興せよとの、父母の教訓が身に沁みて、初めより教育藝術を以て世に立つこととなり、何時となく、獨身生活を送げたものであります。近來は、時勢の變遷に伴れて、獨身生活の人が殖えるこのこととございますが、それは何故でありませうか、一方には學問藝術が盛に

なり、婦人の品位が高まり、他方には経済的の事情所謂生活難が高まつて来る爲であるとか、又は徒に西洋の眞似をして見る、氣位丈高くなつて、結婚はしようと思つてもすることが出来ないと言ふやうなものも、あるさうであります。此等の中でほんの身儘勝手から生ずるものは、固より論ずるに足りませぬ。又家庭の事情より結婚の出来ないと言ふやうな人は、同情すべきことであります。そんなことでなくて、己が修め得た學問藝術の爲に生來結婚せず、獨身生活をしようと言ふ人があるやうであります。此等の人は、國中を求めたら、随分數も少くはありますまい、又極稀なことながら、自分は眞に教育又は藝術の天才であるとか、或は父母主君等の爲に結婚することが出来ぬ、結婚すれば、國家社會の爲、父母主君の爲が出来ないと云ふ人は、實に萬已むを得ないことで、其の獨身生活の理由を承認せねばならぬことでありませうが、さうでない、尋常一様の獨身生活の空想は、斷じて賛成する譯に參りませぬ。

獨身生活は末遂げず

現に教員をしたり、一種の職業に従事したり、藝術にいそしんだり、或は男子の束縛などを恐れて、結婚しない婦人を見受けますが、決して永續は致しませぬ。却つて年老つてから思はしくない所に結婚したり、甚だしきに至つては、不義野合なごし、墮落の淵に沈む人があるやうであります。前述の如く、自ら信ずる所あつて一生を童貞に終はるが如きは宜しいことでありますが、先づ十人に十人ながら、そんなことは出来ぬことであります。一旦結婚し、不幸にして良人に死別し、餘生を教育其の他の爲に送るが如きは、自然のことで、却つて結構なることであります。一般の婦人に對しては、良妻賢母を目的とし、獨身生活など送つてはならぬと申す外はございませぬ。

獨身生活と結婚生活

古より男子であれ、婦人であれ、道の爲に一生童貞を守つた人もないことはござ

いませんが、それは絶代の偉人か、非常なる忠臣孝子烈婦の類か、或は藝術の天才に止まるのであります、普通の人で、そんな真似をしようとする事は、却つて身を誤ることになりはせぬかと思ひます。而も勝手な獨身生活の空想などを懐いて居た人が、中途にして結婚をしても、真逆のときは、何時でも離れて獨立する、強て、良人舅姑に仕ふるに及ばぬ、大勢の子供を育てることはうるさいと云ふやうな、病的の事になりはせぬかと思はれます。婦人としては、どうしても良妻賢母を目的とせねばなりません、己に良妻賢母を目的とする以上は、男子のやうに、一種専門のことに熱中することは出来ませぬ、志はあつても、良人の内助、子供の養育、舅姑の世話などで、そんなことは出来ませぬ。であるから、餘計な空想などを懐かないで、婦人としての教育、即ち良妻賢母になり得る丈の訓練を了へましたら、良縁を得て結婚すべきことゝ存じます。

尼僧生活は如何

古は、皇族の姫君達の、臣下にも降嫁し兼ね給ふ所から、已むなく尼僧におなり遊ばして、清き童貞の生涯を送られたので、今日も御在世の方もあります。従つてそれに付き随つて尼となつた方も、あつたのであります。眞に發心しない方は實にお可愛さうなことであります。尼僧生活の如き、只一時の出來心であるとか、結婚しても離縁されたとか、何か思はしくないと云つて出家するやうなのは、到底眞の尼僧生活を遂ぐることは出来ませぬ、又今日、教育又は藝術の爲に、初めより獨身生活の方もあります。例へば嘉悦孝子女史の如き、私の従妹に當る跡見玉枝の如き、眞に目的の爲に、清い獨身生活を渡つて居るのであります。そんなことを、一般の女性が真似ることは、危険至極であります。

處女諸君に望む

今日は、何事も世界的にせねばなりませんから、學問を廣くしますことは、必要であります。若い時代に良縁を選んで結婚し、良人又は子女を通じて、國家の爲を

致したいものであります。

第二編 主婦の巻

若婦人の警訓

誤れる結婚の考へ

今の若い婦人は動もすると、結婚するにしても姑の有無、小姑の數と云ふものを探つて見たり、夫婦一緒に遊びに出たり、芝居へ行つたり、流行を追ふことを考へたりして、嫁つた先の両親を大切にするとか、困難に打勝うのと言ふやうな心がないやうです。若しそんな蟲のいゝ事を考へて、結婚するものなら、嫁つた當座は面白くても、直と厭になつて終ふのです。一體に自由結婚が許されてから弊害百出で、日本の女のやうに、今迄の習慣に従つて親と親との命令で結婚したものが、自由結婚が許されてから、離婚者の數も増して來たかと思ひます。

こんな覺悟を要す

姑小姑のあるのは當然の事であるから、嫁かぬとか、嫁らぬとか言ふ娘の親の不心得も程はありません。十年辛抱する氣で居て、未だ駄目なれば二十年辛抱するので、二十年で駄目なれば、三十年でも四十年でも一生でも、辛棒するのです。何うせ生れて来たからには、苦勞しに生れて来たもので、樂をしに來たものではありませんから、敢て何でも辛抱すると言ふ氣象でなくては不可ません。

活動と養老に注意せよ

嫁してからは、一には妻たる人の手腕に依つて、一家が治まつて行くので、一家の要目となるのも、夫の成功不成功をするのも、妻たる人の力によるのです。舅姑を大切にするのは勿論の事で、妻たる人は、下女ともなりして、働かねばならず、拭き掃除は言ふまでもないことで、雑巾掛もして女中と一緒にやつて働かねばなりません、女中委せにして置くと言ふのは、一家を修める上に於いて、何よりの恥

でもあり、缺點でもあると思ひます。其れから夫の兩親は、何より大事なのに、中には兩親を隠居さして仕舞ふのがあります、未だ丈夫であるのに、自分の思ふ通りにしたいと言つて、隠居させると言ふのは、妻の道として外れて居るかと思ひます。

羞恥心と今昔の女

昔は男に女が話を仕掛けるとか、平氣で男の家へ遊びに行くとか言ふ事は、恥のやうに思つて居たのです。例へば己むを得ず、男女席を同じうしても、一語も話をすることは出来ず、お互に赤い顔をしたものですが、今の女學生は圖々しいと言ふのでせうか、こんなことは平氣で、男の噂をしたり、初めて會つた男の所へ行つたりするのがあります。女には何よりも大切な羞恥心に乏しいやうですから、眞實歎かばしい事と思ひます、結婚するにしても、あの人は容子が好いとか、學士だからと云ふ淺見で、結婚するものだから、直と愛情が冷めて仕舞つて、離婚する人が多いのです。離婚されても芝居を見に行つたやうな氣で、恥とも何とも思はないのです。然う

して少しも夫の氣に入るやうにとか、舅姑の氣に入るやうとか云ふやうな事を考へないのがある、之に比べると親と親との約束で結婚した人は、却つて幸福ですと言ふのも、未だ少しも知らないから、結婚しても何うしたならば、夫の氣に入るだらう、ごうしたならば、舅姑の氣を損ねないだらうと、小さい心を絞つて苦めるから、自然に夫や親に對して愛情が深くなつて、舅姑には愛され、周圍からもよく言はれて、誠に楽しい日を送る事が出来るのです。

夫婦間にも禮あり

最初夫たる人は、餘りに早く懐けやうと思つて、大切にすると、女だから次第に嵩じて来て、夫を侮辱するやうになるものである。だから結婚の時に妻たる可き女に言聞かせて置く時には、非常に夫婦間が、長く圓滿に治るもので、最初の一言で、夫の權威を損ねて仕舞ふのです、夫婦には、厳格な別があるもので、朝はお早うと言ふ挨拶はなす可きもので、明かな界がなくてはならないのです。其が餘り

に狎々しくなつて、夫の範圍内にまで立入つたり、無益な干渉をするやうになると夫は妻に對して嫌厭の情を起すものである、男子は一旦嫌厭の情を起すと、家を外にし勝になるものであるだから、其處を妻たる人は、呼吸を呑込んで、夫の心を損じないやうにしなければならぬ。

夫の愛を失はね所以

若し酒を飲む人なれば、勤に出て歸る頃には酒を用意して、何か好むものを整へ疲勞して歸つて來るのを、快く迎へて慰めねばならぬ。夫の留守中には、夫と話の出来るやうに、夫の好む書籍を讀んで、何を言はれても困らぬやうに、心懸けて置きたいものです、だから一日として、一分として心を許す隙はないので、夫が出て歸るまでには、床の軸物を取換へたり、花は四季の眺に應じて、様々の花を生け替へて、外より歸つて來る夫の眼を慰め、優しき言葉にて其の日に在りし出來事の面白かつた事、訪問して來た人の談話、又は新聞紙上の新しい出來事を談して一

日の夫の苦勞を慰めるやうにしたならば、一家は何時までも春が來たやうに、和氣洋々として、樂みの盡きる事はありますまい、家庭は一つの王國ですから、王國の主たる可き妻が、妻としての務をしなかつたならば、不和になるのは當然です。

妻の出迎は肝心也

ある上流の家庭では、夫人が夫が歸つて來ても、出迎へにすら出ぬ人がありますが此は妻としての務をしなと言ふもので、夫の歸宅には整然と待設けて居て見苦しい姿を夫に見せないやうに、亂れた髪は調へ、顔は奇麗にしてさうして、歸つて來たならば、玄關へ出て出迎へなくてはならないのです。お歸りと言ふ聲を聞いても出迎へないなど、言ふのは、甚だ善くないことです、さうして歸つて來た夫の心持の不快さはありますまい、妻が整然として出迎へてくれた時の心地好さと樂しさはありますまい、然すれば妻は夫からは眞から愛されて、不幸な事に逢ふやうな事はありませぬ。

愛がないと永續しない

結局、妻が怠惰であるとか、不檢束であるとか、見苦しい姿をして居るとか言ふのは、夫を愛しないからで、心から愛すれば、決して斯う言ふ事はしません、愛さねばこそ、夫に愛憎を盡かされるやうな振舞もするものかと思ひます。併し男子にも今日では随分、陋劣極まる人があるもので、財産があるから、嫁になる可き女はよくはないが、養子に行くとか言ふやうのがあつて、全く驚く程の卑劣極まるのがあるのです。中には財産を目的にして、夫婦養子をする人がありますが、餘り善い現象とは思はれません。

清潔整理が肝心

訪問した時に玄關を一見して、其の家の奥様の心の程が判ります。玄關を一見して主婦の心の有様が判るのでから、僅かなことだと言つて打捨て、置くど、妻の恥のみではなく、夫の恥になる事である。玄關の前に草が生えてゐたり、式臺に白く

塵埃が積つて居たりすると、如何にも其の家の妻たる人の心が推量られて、何となく輕蔑の念が起つたり、日常の行儀作法が思はれて来るものです。玄關が清くしてない家は、室内も奇麗にしてはありませぬもので、來客だと言つて慌て、其處にある物を取片付けるやうでは、どうして毎日を暮して居るのか、判りませぬのです。

茶の湯の修練を要す

作法も小笠原流計りでは不可ません。何しても點茶を習はねば不可ません。點茶の心得のない人は、家を掃除して終つて、床を飾るにしても、法に叶つた飾様をして、見ても心持の好いものです。火を埋けるにしても、奇麗に埋けて客の前に出しても、恥かしくないのです。矢鱈に炭を突込んだのは、何となく淺間しいものでその家の夫人の事が、よくは思はれません。軸物を掛けても體裁よく懸けてあると入つて行つて心持が、いゝものです。何をしても點茶を習つて置けば、花を一枝生けるにしても、茶を注いで出すにしても、床しさが見えるものです。何しても眞の人

格と言ふものは、内外の行ひが完全して居なくては、得られないものです。現今名の出てゐる何々夫人とか、何男爵とか言つて持囃される人よりか、隠れてゐる人の方に、人格のある人が多いもので、立派な行爲をしてゐます。

眞の交際と禮儀

私は大阪生れですが、鴻の池とか言ふやうな大家になりますと、元旦には分家の主人が妻子揃つて、本家の奥様に祝ひに、お禮に行くのです。決して昔とても社交がなかつたと言ふのではありません。滅多に出ないとは言ひながら、出る可き所へは出て、盡す可き道を盡して居るのです。其れが現在では出なくても好い所へ、自分から求めて交際社會に出て居るので、つまりは餘計な時間を空費してゐる譯で、不經濟此の上もない事です。然う言ふ人に限つて、家の内の能く行届いて居ないものがあります。で前に言つた通り、暑中に、元旦に、分家からは本家にお禮に参りますが、又本家では、本家同志でお禮に往つたり來たりして、決して道に外れたと言ふやう

な事はしませんでした。で昔とても交際はあつたのですが、今のやうに家の事を打捨て、行くやうな事はなかつたので、家を修めて後に、初めて交際をしたものです。其が今では繁多になつて来たのです。此も時勢ですから、仕方がありますまいが、家を修めて後に、交際界へ出てこそ、始めて交際家と言ふ價値があると云ふものでせうと思ひます。其が只今は交際はして居ても、日常は何々夫人と言はれて、花形のやうに交際界で持囃されて居る人が、歳末の訪問などすべきとか、旅行中とか言つて禮儀を缺くのは、餘りよろしくはありませんまい、其では何の爲の交際か判りません。

師弟の間を温めたし

其れに今では、師弟の親みが薄ぎました。此れは歎かましい事で、恩を受けし先生の所へ元旦になつても行かぬのは、禮儀を知らぬと言ふものである。其が官立の學校になると甚だしい、と云ふのも、校長や先生の異動が多いので、師弟間の温情を温めると言ふ事が出来ないからです。其れが私立になると、其の弊害が少いのは

喜ばしい次第です、今の若婦人は動もすれば、流行を追ひ、贅澤をなし、樂に世を送りたいと言つてゐる人が多いやうですが、是程の心得違はありません。何の爲に學問するのか判りません。私は斯う言ふ點には、非常に注意しまして、跡見女學校の倫理は、中島徳藏さんに受持つて頂いてゐますから、五年四年の生徒には、強く頭腦に印象されてゐますから、斯う言ふ點に就いては、安心してゐます。

父母の嚴誠を要す

家庭に於きましても、父母が娘にそんな事をしては、時勢遅れだと言はれると、父母は然うかと思つて、娘のする事が尤もらしく見えるものですから、娘の言ふ通りにしますので、横の道に入るやうなことに、なるのだらうと思ひます。父母は父母の權威を捨てないやうに、恐ろしいものには思はれて居なくてはなりません。總て今の若い婦人には、一般に女らしいとか、床しいとか言ふ所が少いやうです。臆病では仕方がありませんが、餘りに出過ぎてゐては、猶更に困ること、思ひます。何うか若

い婦人は何處までも、女らしい事をして、禮儀を忘れないやうにして、而も新智識を得るのには、一日も忽にしないやうにして頂きたいと思つてゐます。

嫁と姑との和合

媒酌人なごの誤見

時々卒業生の事に付き、聞き合せにお出でになる方がございます。さう云ふ方がいろいろのことをお話しになる中に、先様には舅姑がないから、お嫁さんは大變に氣樂だとか、お父様は、疾くに喪くなつてお母様はあるが、もう七十の坂を超えてお在でだから、永くもありません。暫く我慢さへして頂けば、跡はお嫁さんの天下ですなご、洵に酷いことを遠慮なく仰しやるのを、毎度承ります。一體舅姑なるものは、そんなに厭なものなのでせうか。

姑に盲従する覺悟

私などは、思ひ存分の若い同志の家庭より、舅姑のあつた方が、どれだけ家の爲になるか知れないと思ひますが、扱て世の中は妙なもので、少しでも朝寝がして見たいとか、少しでも氣儘に暢氣にして見たいと云ふのが、人情なのでせうか。當の御本人は無論のこと、その父たり母たる人が、既に舅姑の居ない、成る可く氣樂なところへ縁付けたいとお望になるのは、全體どうしたことでせう。考へるまでもなく、若いお嫁さんと年老いた舅姑さんとは、第一思想が違つて居ます。無論教育の度合も違つて居ます。意見の衝突は到底まぬがれるわけには参りますまい。私の申します、お互様の我慢と云ふのは、此所なのです。敢へて舅姑と嫁との仲ばかりではありません。繼母と子の仲でも、夫婦の間でも、此の我慢といふ事がなかつたら、一日も家を治めることは、出来まいと思ひます。

舅姑も我慢を要す

或所に、舅姑と意見が合はぬからとて、二十七歳までの間に、四度もお嫁さんに

行つたとか云ふ、お嬢さんがあつたと云ふことです。又どうも、面白くないと云つて三遍も奥様を取替へた人のことも聞きました。自分で生んで、自分で育てた子供でも、自分の思ひ通りにならぬ勝ちです。況して人様のお育てになつたお嬢さんです。自分の思ひ通りの型へは、容易はまるものではありません。其れを氣に喰はぬとて追ひ出す舅姑は、先づ没分曉者云ふほかはありません。

赤い心に白い禪

又お嫁さんの方から見ても、自分の生れた時代、自分の育つた時代と、舅姑さんの生れた時代、舅姑さんのお育ちになつた時代とは、大變に異つて居る、従つて教育も違ふでせう、思想も違ふでせう。時代を隔て、生れた以上は、其の教育も思想も違ふのは、無論である。其の違つた同志が、かうして一緒に居る以上は、お互様に我慢をせねばなりません。舅姑に對してならぬ勘忍するのも、要するに自分と同體の所夫に捧げる愛情の一であると、赤い心に白い禪をかけて勤めたならば、決して勤

まらぬことはあるまいと思ひます。

夫の優しき慰めの言葉

尤も廣い世の中には、實に理不盡なことを云ふ舅姑が、可なり澤山にあるやうにも聞いて居ますが、これは全く論外と申すものでせう。あの家は舅姑が難かしいから、嫁が居つかぬとか、嫁が悪いのではない、舅姑が悪いのだなどと、能く世間の噂を耳にすることはありますが、不幸にして斯うした所へ嫁入つた人は、とても勤まり兼ねると思つた場合には、何もかも所夫に打明けて、所夫の裁判を仰ぐより、外に途はありますまい。富の程度にもよりますが、若夫婦別居さして貰ふのも一方便でせう、家庭の都合で舅姑さんに家を出て戴くのは、萬止むことを得ざる一方便でせう、嫁が姑を追ひ出したなどと、よく世間で申しますが、其程難かしい舅姑さんのことなら、世間は却つてお嫁さんに同情を寄せます。無理はない、あした事になるのは、自然の結果であらう、あゝもしなければ、あの家は納まらぬ

のであると、世間は却つてお嫁さんに同情を寄せた實例は、これまで幾らもありません。舅さんは大變に優しいが、姑さんが難しいため、お嫁さんはどうくあゝした、哀れな最後を遂げたなど、新聞で見ることもあります。斯うした悲劇の演ぜらるゝのは、お嫁さんの思慮の足らなかつた故にもよりませうが、一面には嫁と姑との仲に立つたお舅さんが、餘りに淺慮であつた結果であるとも申されませう。

世の中を辨へたし

『姑さんがごんなに難かしくとも、所夫が優しくしてくれますから我慢して居ます家を外に遊び歩くやうな所夫であつたなら、到底勤まるものでありません。』と云うやうな述懐をよく承りますが、全く其れに違ひないと思ひます。斯うした場合に所夫なる人の意は、随分苦しいでせうが、其所が『世の中』と申すものでせう。『お前は嫁と一緒になつて私を虐める、何事につけても屹度嫁の肩を持つ、私が悪いのだ、私さへ居なければ、此家は圓く納まるのだから、私は出て行く（私が死

んだら、本望だらう。』などと、駄々の限りを捏ねつけられる。若夫婦の苦心は洵に同情に堪へませんが、其所が前にも云ふ『世の中』です、此處の所をよく悟つて、出来るだけ姑の機嫌をとるやうに努めるのです。勤めて勤め抜いて、夫れで不可なかつたら別居なり何なりして、一家の圓滿を圖るより外に、途はありますまい。

姑と嫁とは繼母子の如し

此の姑と嫁の關係は、丁度繼母と繼子の夫れと、似通つた所があります。同じ打たれても、生みの母に打たれたのと、繼しい母に打たれたのでは、感じが大變に違ふさうです。生みの母なら可愛いから打つた、恠口にしてやらうと思つて打たれたのだと首肯かれも致します。が、繼しい仲ですと、さうは参りません。繼母の方からも、憎いから打つたのだと、悪意に解釋されるから、寧ろ何事も言はず、構はずに居ようとするれば、又少しも構つて呉れぬ、面倒を見て呉れぬ、だから子供は段々横着になるなどと、蔭口たゝかれる、斯うなると繼母なるものは、どうして良

いのか譯が解らぬやうになつて、殆ど其の立場を失つて仕舞ふとは、能くあること
 です。姑と嫁との仲も、全くかうした關係からして、嫁は姑を僻む、姑は嫁を
 僻む、其の結果、嫁は我から自分の身を殺すやうになるのではありますまいか。併
 し、自殺すると云ふやうな事には、如何なる理由があるにしても不賛成です。お互
 に辛棒がし切れなかつたら、別居するより外ありませんが、家庭の都合で、其の別
 居が、どうしても出来ないとするれば、已むを得ないことであります。

嫁姑の調和は主人の努力

兎に角嫁と姑との問題は、本人同志は固より、其の中間に立つ主人、即ち嫁の
 所夫にも、大に考へて貰はねばなりません。主人が能く機轉を利かせ、自分の威嚴
 と愛情とを以て、生みの母親と、最愛の妻との調和を計つたならば、十中の八九ま
 で、忌はしい問題は起らずに済むであらうと思ひます。今の若い婦人達は萬事理屈で
 押して行かうとし、姑は永い間の經驗からして、嫁を盲従させようとする。其所

が抑々衝突の始ですから、主人は細心の注意を拂つて、兩者の圓滿を圖らねばなら
 ぬと思ひます。

健全なる家政の執り方

夫婦共稼ぎを勧む

何事につけても、生活上に餘裕のある、富裕な上流の人々には、其の必要を認
 めませぬが、中流以下の家庭に於ては、此の際何うしても夫婦共稼ぎをすること
 が、何よりも必要のこと、思ひます。一體我が國には、妙な習慣がございまして、
 中流位の家庭で、妻女が内職でもすると。大變卑しい事のやうに考へる人がありま
 すけれども、此の囚はれた習慣は、今日何うしても打破らなければならぬ事と考へ
 ます。之を打破ることが、刻下の急務であります。

手を空しくする勿れ

苦しい、困る、とても立ち行かぬと、生計困難の叫びは、此處にも彼處にも聞えませんが、それではと申して、此の困難に堪へる爲め、私はこれの仕事を始めましたと云はれる方は、餘り聞きませぬ。左様に苦みながら、手を空しうして暮して居るのと、暇々を繰り合せて、假ひ少しの仕事でもして居るのと、果して何れが尊いか、何れが愉快であるか、是れは如何なる人でも、深く考へないで、直に判断のつくことであらうと存じます。

今は大に働くべき時也

總じて働くといふことは、卑しいどころか尊いことなのです。同胞七千萬人の半分は、女子です。此の大多数の女子が、此の際働くことの尊さを自覺し、大に奮ひ起つて御國の爲め、積極的の活動をするに申すことは、何よりも大切なこと、確信致します。考へて御覽なさい。古來例のない歐洲の戦争は、今のところ何時果てるのやら分りませぬ。それに時と場合の成行き如何によりましては、日本も何時そ

の戦争の爲に、出兵するかも知れぬではありませんか。彼れ是れ思ひ合せると、只今の時勢は、決して〜浮つかり暮らしては居られませぬ。

働くことは幾らもある

働く氣にさへなれば、又働かさへすれば、女子の仕事でも幾らでもございます。「武士は食はねど高楊子」と申すのも、物事に依ります。今後の世の中は、議論や理屈ばかりでは、到底立ち行くものではありません。それ故に皆禱を確りかけて、働かねばなりません。實際手を下し、汗を流して仕事をせねば、役に立ちませぬ。百の立派な書籍も、本箱の中へ藏つて置くばかりでは、何の効果もあるものでありませぬ。右の如き次第ですから、私は中流以下の妻女たる人達が、いつまでも手を空しくして暮らしてゐることを悪いと思ひます。内職でも何でも宜しい、家の爲め國の爲め、進んで仕事をする様になることを、心から望んでゐるのであります。實際主人一人が汗水流して働いて得た金を、妻女は家に居て懐手をして居ながら、使

用して行く云ふのは、全く面白くない現象だと考へます。

新年を區切に着實に

曠古の御大典も、國を擧げての歡聲の裡に滞りなく相濟みましたし、大正ももう五年となりました。我が國民は此の際、殊に確りと落ち付いて、益々着實になり、愈々質素儉約を守るやう、努力しなくてはならないと存じます。それにも拘らず、近頃の世の有様は如何でせう。鷹が飛べば、雀も飛ぶと云つたやうに、一體の人心が上ばかり見て、一から十まで上をのみ見倣ひ、兎角に贅澤三昧を盡して居るではございませぬか。

言語同斷の仕打

斯ういふ有様が、此の後幾年も續いて御覽じませ。さらぬだに貧乏國と呼ばれる日本の國は、益々貧乏して仕舞ひます。どうも心細いではありませんか。殊に或る種の家庭になりますと、浮薄の風が分けて甚だしく、質入れをしても、替り目毎に芝

居に出懸けるのを、大層甲斐性者だと云つて居るやうな傾きがあるとか聞きましたそんなのになりますと、誠に言語道斷と申す外はありませぬ。

奢侈ほど不便である

私は思ふに、すつと上流の人達には、却つて質素な方が多いやうに思はれます。が兎に角、近來は奢侈の風が一般に漲つて居ります。何處に参りましても、何處を見ましても、立派な家がどしどし建つて参ります。人間は皆立派な衣服を着て歩いて居ります。或家などでは、三十間以上もある長廊下を持つた構へがありますか、かゝる宏大な住居は、却つて不便勝ちであるまいかと思はれます。ベルを押す女中が出て参りますにしましても、餘程時間がかかります。又た斯かる家では、そこに奉公する女中達も、幾倍か忙しい事でありませう。長い廊下を駈けて行くだけでも疲れるではありませんか。勿論必要があるのでしたら、それも止むを得ませぬけれど、それでなかつたち、便利で住心地の好いのを限度とし、何も家の宏壯なものを街

ふやうな事なく、過したものであります。此の決心は、殊に目出度い大正五年の春を迎へるに當り、此の年の區切りを境として一層強く、確りと守つて行きたいことだと存じます。これが何よりの記念になりませう。

無理は女が本

一體何處の家でも、奥様がこれ／＼の着物が欲しいとか、外套が買ひたいとか云つて主人に強請ると、どうしても主人は、何時の間にか負けて仕舞ふ。これと同じやうに、子供達が美しい着物が欲しいとか、リボンが要るとか申して強請ると、親は一も二もなく負けて仕舞ふのが、世の常なのであります。現今新聞紙上に散見する、いろ／＼な罪惡の行はれる、其の裏面を見ますと、大抵女が潜んでゐます。女子の虚榮の満足を充たさせたさに、堂々たる男子が、心にもない惡事を働くやうになるのであります。實に愚かな事のやうでありますが、實際がさうなのだから仕方がありません。それ故に女たるものは、一層注意して自らの言行を慎み、此の

際根本から虚榮心を去らなければなりません。さうして兎に角、女が確りさへ致しませば、一家の經濟は屹度上手に、手際よく取り廻されるものなのであります。

社會の惡俗を改めたし

一方一般の社會にも。餘程慎まなくてはならぬ事があります。例へばあの方はあの年をして、未だ家内に美しい衣服も買つて遣れないのださうだなど、嘲笑する風習の如きは、嚴に慎むべきであります。さういふ虚榮を増長させるやうな社會的風習は、誠に怖るべきものであります。而も斯様な有様が、今の我が國に頻々と行はれ、世の中は一向に奢侈贅澤に流れて行くのであります。

家政の健全は女の心懸

今後の婦人は、餘程確り自己の虚榮とか見榮とかいふものを、制して行かなくてはなりません。一面主人たる人も、今少し強くなつて、女の云ひ分に徒に負けることのないやうにして貰ひたいと考へます。さうして夫婦は、互に心の結合を以て

相扶け、表面の美とか體裁とか申すことに心を惑はせず、眞に眞面目な家庭を成立して、ごしと國の富を増して行くことに、努めなくてはなりません。要するに家計の健全と否とは、其の源は女の心懸け一つにあると思ふのです。

女は裁縫を尙ぶ

何處の家庭にしましても、四季折り々の衣服を他人手にかけて、他處で裁縫をさせること云ふ事は、此の上もない不經濟なものであります。大抵の忙しさなら、裁縫は必ず自宅ですべきものであります。假ひ其の家が、何か非常に多忙な家でありまして、止むなく人手に渡さねばならぬと致しましても、主婦に裁縫の素養があること、餘程經濟の取り方が巧く行きます。例へば布の冗費をしたり、要らないものを作つたりするやうな事がないだけでも、非常な違ひであります。

料理と家庭の和合

料理も亦これと同様でございます。例へば一寸の客來にでも、直ぐ料理屋へ注文

すると云ふ風になりますと、誠に不經濟であります。それに料理の素養の十分あり、調味の上手な人は、同じ材料を用ゐても、非常に手際よく、美味しく頂かれるやうに拵へます。さうすると、主人にしても、自然外へ出て、何か變つたものを食べたいなどと云ふ慾望が起らぬやうになり、従つて經濟上、餘程工合が宜しくなるのであります。

家庭教育と母親の賢愚

子供は我々の後を承継いで行くべき、つまり第二の國民であります。此の子供達の出來の悪いと申す事は、其の家の不幸ばかりではなく、誠に國家の上にも非常な打撃となる譯であります。さうして其の子供の良くなるか、悪しくなるかといふ事は、全く家庭教育の結果に在るのであります。更に進んで、家庭教育の責任は、何處にあるかと申しますと、勿論其の家の主婦の上にあるのです。學校などでも、生徒の言動や、何かにより、あゝ此の生徒の母親は、立派な人であるな」と、云ふ

事は、唯一眼で解することが出来ず。でありますから、母親の教育は大學校の教育よりも、より以上に力あるものだと私は考へます。

子供は母親次第也

若し其の母親が確りした人で、日常の躱けが嚴格でありますと、男の子なら他日一人前の人間となる時、女の子なら他家へ嫁いで行つた時、屹度立派な成績を擧げることが出来るのであります。實に子供は母親次第であります。其れをよく昔と今とは時代が違ふからなご、申して、母親が子供の云ひなり次第に、負けて居るやうな、家庭を見ることがありますが、昔も今も、道理に變りのある筈はありませぬ。親が子供の躱けをして行く上に、更に變りはないのであります。此の邊の所に考へ違ひをしてはなりません。

子供の健實と教育

亦世の母親たる人は、假ひ其の家が如何に富裕であらうとも、決して子供を贅澤

に慣れさせてはなりません。可愛がり過ぎるのも、却つて子供の爲めに悪く、子供の身體を弱くさせる原因となります。ですから、或程度までは放任して、身心共に強健な子供を造り上げなくてはならぬと思ひます。それから、假ひ其の家が生計が不如意でありませうとも、子供等には一通の教育をさせる、此の決心が母親になくしてはなりません。石に嚙り付いても、子供は一人前に育て上げて行くといふ堅い決心を、母親が持たねばなりません。此のやうにして、上下擧つて獨立心の旺んな、身體の強健な子孫を、いゝ殖して行きまして、國家の經濟を富裕にしなくてはなりません。これが亦一面から申すと、一家の生計を健全にする基なのでございます。

我が校の精神も同じ

私は此の趣旨に依りまして、此の節痛切に質素儉約と云ふことを、考へずに居られないので先づ教育者としての私は、跡見女學校に其の趣旨を施すのが、急務と思ひましたから、疾くから考へて居ました、制服を定め華美な服装を止めさせること

を、未だ實地に行ひ得ませんでしたで、曠古の御大典を此の上もない機會と致しまして、一反一圓四十錢の紫紺の木綿の仕立服を、制服と定めまして、服装を、全く揃へました。又教職員も同じやうに、服装を定めて、生徒に接するやうに致しました。斯うして制服を定めますと共に、其の精神を持つて平素の行ひの上にも、一々其の私の趣旨を現はして行くやうに、勤めたいものであると考へて居ります。

床しい若婦人

一家の平和は貧富に拘らず

世間の方は、有福では孝行しても目立たないの、金銭に不自由がなければ、老人に盡しようがないのと仰しやいますが、よい身分で何不足なくとも、感心する行ひをしてお出の方は幾等もございます。一體女の務めたる家庭内の事は、凡て小さな事柄が、非常に何事にも響いて行くものですから、凡そ善い事は、小を積んで大を

爲すやうにするのが、成功の基でございます。故に一家の事は、其の心懸で、何事も處理すれば、家の内は風波など、立ちたくても立てぬやうになつて仕舞ひますから、何時も平和で過して行けるものです。

婿取の娘の好い模範

跡見女學校の卒業生に、安田てる子といふ方があります。此方は、有名な安田善次郎さんの長女で、今の善次郎様の相續人の、善三郎さんの奥様で、もうお子様もある方ですが、未だに御両親には大の御秘藏娘で居らつしやるのです。併し、婦人は夫を持ちますと、其の良人に従つて行かねばならぬものですから、どんなに御両親がお可愛がりになつても、御主人の御歸宅時迄、長く親御の御機嫌を伺つて居らつしやる譯には參らないので、これはもう世間一般普通の事でございますから、申す迄もございません。此の點から申すと、お嫁に行つて御舅姑達の御機嫌を取るよりは、家附の娘で居て夫を迎へて、両親との間を取りなして行く方が、どれ程むづ

かしいか分らないのでございます。殊に、子さんは御両親の寵愛も大層深いので、すから、口に出してこそ、何とも仰しやりはしません、中々、御主人と、御両親へお仕向けも、骨が折れる事であらうと思はれます。

両親へ親切な仕向

此方が先達ての好いお天氣の日に、午後、私宅へお出でになつて「今日はお天氣が好いから、午前のうち、父母と一緒に、上野へ行つて参りました」と仰しやるから、それはよかつたとお返事をする、昔の生徒のまゝのあざけのない様子で、親しくかう話されました。「私は日常から、父や母の傍にも長く居て、何かと話しの相手でも、仕て居たいのですけれども、主人の都合で思ふに委せる時がない者ですから、つひ父が招んで呉れても、参れぬ時などもあるのでございます。誠に恰度今日は、主人も不在で、こんな好いお天氣でございますから、かう云ふ時こそ、ほんとに何とかして父母と一緒に楽しみもし、樂ませもしたいものだと思ひまして、恰度其の時、父

は少し風邪の氣味で勝れませんでしたけれど、庭傳ひに、父の住居の方へ参りました、お父さん、こんな好い天氣でございますから、何處ぞお出掛けになつて、如何でございます。私も恰度今、子供も午後まで歸りませんから、何處かお供さして頂きたい。上野の展覽會か何かへ、自動車で伴れて入らして下さいますしななご申しまして、母共々に、上野へ参りまして、歸りに静養軒に寄つて御飯を頂きました。さうしたら父がかうして、親子三人が御飯を頂くのは、随分久し振りであつたなご申して、私は何時でも晝食は銀行でお辨當を喰べるのだが、今日はてる子のお蔭で、おいしい洋食を喰べられると喜んで居りました」と、さもなく嬉しさうに話されましたが、其のお父さん、連れてお供さして下さいな、お母様も御一緒にと言はれた處が如何にも可愛らしい、やさしい所ではございませんか、御良人に對しては、何處までも大人で、妻の責任を盡しながら、親御にかう仕向けるのは、誠に好いなされ方だと思ひます。

氣の利かせ所

まだてる子さんが、父母と御一緒の家にお出でになつた時分にも、善三郎さんのお歸宅が、夜分お遅い時などに、母上は御養子の氣を兼ねて、先に休まうか休むまいかと、迷つて居らつしやる御様子でもあれば、お母様、私一人で起きて居ては淋しいから、もう少し起きて居らして頂戴よ、と言はれるさうです。これをもうお休み遊ばせ、あとはお構ひなくなご、お嫁さんでない若奥様から言はれる母上に比べたら、どんなに母として嬉しいか分りますまい。こんな小さな事は、若夫人の仕方一つで、大御夫婦が心持よく出来るのですから、前に申した、小積んで、大を爲すには、よく叶つて居ると思ひまして、つまらない些細な事が、圖らず大層感心されましたから、お話し申しましたのです。

いろく優しい若夫人

まだ、このてる子さんと申す方は、いろくな、やさしい事をなさる方で、川施

餓鬼の戒名書きをするのが、何よりの樂みだと言つてお出でです。一枚五錢の志を添へて、自分が今まで持つた友達の中で、故人になつた人の數を有る限り書き、恩になつた先生や世話になつた人達の中の、亡い人を考へ出して、其の戒名なり俗名なりを書き、まだ書き足りなくつて書くのは功德になるから、名を隠しておくれ杯と、女中達の分まで引受けて、お書きになるのです。此の外にも谷中の方へ行けば、谷中の墓地にあるお友達のお墓、青山へ行けば、青山に祭つてある先生のお墓、橋場でも、母上の御恩になつた方のお墓や、御親類のお寺と云つたやうに、必ずお詣りをするのが何より樂みで、家の御祖先のお墓は誰か、安田家の本分家二十家の内で行くものがあるから、香花の絶える心配はないが、其の外の人のお墓、殊に母上の恩人の墓となつては、母上の代理を勤めるやうな氣がして、非常にお詣りが樂みだと云ふ事です。今の若い方にしては大層珍らしい、優しいお心懸だと思つて私は此れを、近頃嬉しく感じた中の一つに數へて居ります。

言葉と身振

言葉では人格の表現

近頃社會一般に言語の亂れました事は、實に驚く計りで、上流社會、中流社會、下層社會等の區別は申す迄もなく、大臣の夫人の言葉も、商家のお内儀さんの言葉も、裏店の女房の言葉も、さては女學生、下女、藝者に至る迄、何が何やら一向無茶苦茶です。一體言葉と云ふものは、何よりも人々の人格を現はすもので、縦ひ現在大臣宰相の夫人でも、又何程富豪の奥さんでも、或は又どの様な立派な服装をした人でも、一寸口をきかして見れば、直に此の人は此の位の人と云ふ事が分ります。それでありますから、幾ら立派な地位のある人の夫人でも、言葉遣ひが卑しかつたら、成り上りだと云ふ事が分り、又反對に零落して貧しい暮をして居ても、上品な言葉遣ひの人でありましたなら、此の人は身分のよい人の零落であると、直に知れるのであります。

であります。

最も聞苦しい嫌な言葉

昔は此の言葉遣は、誠に入笠しいものでありまして、禁中は別ですし、それから出て宮様も違ひました。其の他將軍家の言葉、大名の言葉、武士の言葉、町人の言葉、裏店の言葉、とすべてそれごとく定つて居りまして、決して之を混同する事はありませんでした。それ故に、言葉で直に身分が分つたのでしたが、今は禁中、宮様のお言葉は、別として其の外全く、此等の區別はなくなりました。それも下々迄も、上の人の言語に習うて居るのなら結構ですが、さうではなく、下さまの汚い悪い言語ばかりが、勢力を振うて居るのですから、誠に心細い譯であります。殊に女學生の言葉の汚なくなりました事は、お話になりません。いろんな妙な言葉があるやうでございしますが「よくってよ」「いやよ」「かうだわ」などと云ふのは、一體何處から來たのか、さつぱり分りませんが、實に聞き悪い、嫌な言葉であります。

言葉でお里が判る

近頃は又成金とか云ふものが、澤山出来まして、宮さま見たやうな立派な家などを造り、身分不相應な服装などを致しますが、それは金さへあれば、如何な立派な家も出来やうし、ごんな贅澤でも盡されませうが、併しかう云ふ人々は上の方の處に出た事がありませんから、上の方に對しては、如何云ふ言葉遣をして宜しいか、少しも知らないであります。大臣の夫人でも、其の通りで、元は、よく藝者などを妻にした方がありましたが、さう云ふ婦人は、何時迄経つても、元の言葉が脱けませんで、暫く話して居ると、もう直にお里が現はれて、素人ではなかつたと云ふ事が知れます。名前は申しませんが、いつぞやある大臣の夫人が、何かの晩餐會に出席しました折に、側に高貴の方々も居らせらるゝにも拘らず、「あゝ今夜は大變酔ばらつて仕舞ひました」と申しましたさうで、其の場の多くの人々の物笑ひになりました、其れ切り交際場裡へは、面出しが出来なくなつたと云ふ話もあります。酔は

らつたと云ふ言葉は、先づ車夫か何かの極卑しい者の云ふことでせう。頂き過ぎましたでも云つたなら、何でもなかつたのですが、矢張其の人は、平生から汚い言葉遣つて居つたからでございませう。

毫も訓練のない言葉遣

其れから又召使などになりますと、自分の言葉だけで、人に對する言葉を知りません。自他の區別と云ふ事は私の學校などでも、常に生徒に向つて喧ましく申すのですが、丁寧にせよと申しますと「私のお母様がかう仰しやいました」などと、人に向つて申しますし、さうかと思ふと女中などは「旦那様が今外から歸つて来た」なごど云つて居ります。昔は宮様へ御奉公に上るなど云ふ者は、其の前に二月三月言葉習つたものですが、今はそんな事をする人は恐らくありません。昔の江戸のお大名の奥方は、殊に美しい言葉でしたし、又旗下のも、大きな町人もの、相應によかつたのでしたが、今は全く此の影も見えなくなりました。此の頃は世の中が

忙しくなりました爲か、一體に言葉が短くなりましたたやうで、あまり短く切りつめて申しますので、丸で片言でわけが分りません。早い話が返辭一つ満足に出来る云ふ人は、少うございませぬ。はいと判然は答へませんで、へいだか、おうだか、うむだか分らないと云ふ譯ですから、このまゝ打捨て、置けば、全くの野育ちと異りません。これは學校で教へて直さなければならぬのですが、其の教へる學校の教員が、又何にも知らないで、誠に困ります。

遊ばせ言葉と奥様

殊に小學校の教員などは、昔年も若いし、上つ方の事などは、知らない者が多いのですから、無理ありませんが、どうしても。此等の人々から、先きに直してかからねば、仕方がありません。僅の事で遊ばせと云ふと、誠に上品に聞えるのですが、學習院女學部あたりの生徒を除いて、一般の女生徒には、如何しても、それが出ないのであります。それから今は大臣の夫人でも、官吏の細君でも、長屋住ひ

の内儀さんでも、一樣に奥さまと呼びますが、昔は一國の主の妻でなければ、奥さまとは云はなかつたものです。それから思へば、随分奥様も下落したのでございませぬ。

坐り場所にも注意せよ

今一つ言葉遣と同じく、人格の窺はれますものは、態度であります。これも深く觀察をしませんでも、一寸座敷へ通つて席に着けば、直に何の位の人か分ります。丸きり修養のない人は、坐り處さへ知りませぬ。無暗に遠慮を仕過ぎてもならず、又無作法に上に出過ぎるのも悪し、其の座敷によつて、夫れく坐る場所は異なるものです。けれども他家へ行つて座敷に通りましたも、床の間の掛物を見、置物を見、その他すべて座敷の模様を見て、さて自分の座を定めると云ふやうな人は、今は少うございませぬ。折角主人が心盡しの生花も、盆景も、見る事も知らず、況して賞める事などは、一向知りませぬ。男でもさうですが、女は殊にかう云

ふ事に、注意せねばならないのでありますのに、今の人は餘りに無頓着です。又稀にさう云ふ人がありましても、あの人は行儀作法の心得のあると云ふ事を、見るやうな人もないやうです。

昔の婦人に鑑みよ

服装でも極つた祝儀には、白襟紋付と云ふ丈は、知つて居るのでせうが、中には祝ひの時に、色の襟を掛けて出たり、さうかと思へば、芝居見物に行くにも、紋付や裾模様を着ると云ふやうな次第で、實に混乱して居ります。今は僅に芝居などで、其の面影を窺ふのみであります。昔の大名、武士などの態度は、實に美事なものでありました。女でもお使者などは、御殿の大廣間に通つて待ち受けるのであります。其の場合には、賈の使者か、眞實の使者かを見別ける爲に、周圍中から隙見をされます。場合によつては、何時何度から槍が出るかも知れないのですから、何度から懸つて來られても、直ぐ受けられるやうに、油断なく身構へして居るので

す。其の時一寸でも不作法な振舞を見られたらば、不審の種になるので、褥に上ります時にも、少しでも曲つて居たりすれば、手で正しく直して其の上に座るのです。若しも足で曲げるとか、曲つたのを直すとかするならば、もうそれで賈物に定められて仕舞ふであります。今は大抵大きな處は西洋館ですから、隙見も何も出来ません。それでありますから、そんな心配は要りませんが、昔の事を申して見ますと、まあこんな風であつたのです。併し只今でも矢張御氣分の高い方は何處か違ひます。一寸お能に参りましたも、殿様方は一時間でも二時間でも、膝の上に手を置かれた儘、身動き一つなされずに、見物して居られます。

坐り方と歩き方

此の節は女學校で、作法の稽古を致しますが、如何も餘り應用されないうやうであります。私の考へますには、作法の稽古よりも、却つてお茶の方が、よくはないかと思ひます、お茶を稽古した人が、第一に自分の坐る可き位地を知つて居ります。此

處は通り路だとか、出入りの邪魔になるとか云ふ事を考へて、適當な處へ席に着きます。これが一向そんな心得のない人だと、此方へと云はれても、こゝで澤山で御座いますと、座敷の入り口に坐り込んで、俗にちんころを座敷に追ひ上げたやうだと申しますが、本當にころ／＼する様に坐つて、一寸突いても轉げさうな格好にして居ります。そんな風ですから、一時間も経たない内に、痺を切らして立てなくなると云ふ始末なのです。こんな譯で一寸した道具の扱ひ方、手つきからして、茶の心得の有無は分ります。併し幾らお茶を稽古致しましても、小笠原流を習ひましても、應用が利かなくつては、役に立ちません。本來はかうする者とよく知つて、臨機應變の處置をする事が大切です。幾ら忙しくても、すり足で歩く様では、急の間に合ひませんから、さう云ふ時には、矢張走つて歩かねばなりません。召使の者でも走れない中は、まだ一人前でないのです、早くする處は急ぐ、落付く處は、飽く迄も落付いたと云ふのでなくては、感心出来ません。要するに言語でも態度でも、一朝

一夕には出来難いのでありますから、平生から心懸けて、何時如何なる地位になつてどんな場所へ出ても、教育を受けた婦人として、耻しくないと言ふ丈に、致したいものでございます。

愛嬌と家庭

平和な家庭

何時も春のやうな楽しい家庭に、陽氣に暮して行くと言ふのは、何より芽出度いことでございます。家庭が冷かですと、其の家の人までが、何となく、冷い人情のない人のやうに思はれて、世間の人からも善く云はれません、それと反對に、家庭が何時も平和で、楽しく暮してゐる人は、何處となく悠然した所があつて、如何にも情深い人のやうに思はれます。従つて人にも好かれます。殊に、常に外へ出て働く人は、他人に接する機会が多いから、出来るだけ人に信用され、出来るだけ人に

好かれるやうにしなければいけません。それには先づ自分の心を正しくして、平素にこやかな顔をして居ることが、一番大切で、かういふことは容易に出来さうなことです。實際行はうとすると、なかなか出来ません。少しのことに腹を立て、傍のものを叱つたり、叱言を言はなくてもよいことに、叱言をいつたりすると、自分で氣を悪くするばかりか、傍のものまで氣を悪くして、互に苦い顔をするやうになります。

笑ふ門には福来る

家の中に一人でも、さういふ人があると、家内全體が氣むづかしくなります。何處の家でも主人と云ふものは、氣むづかしいもののやうに思はれて居ますが、上に立つ人がさやうなことでは、家の人は年中不愉快な日を送らなければなりません、これは人として一番不幸なことと云ふことができます。それですから、上に立つ人は思遣を深くして、下々のものを勞り、自分は何時も、にこやかな顔をして居るやうでなければ

いけません。昔から、『笑ふ門には福来る。』といつて、笑ふことを非常によいこととしてをります。笑つてよい氣持になる人はあつても、笑つて氣を悪くする人はありません。

笑へばヒステリーに罹らず

病人には傍の人が氣を利かせて、努めて笑はせるやうにすると、それが薬よりも利くことがあります。笑ふといふことは、身體の爲にも、精神の上にも良いことです。絶えず笑つてをれば、ヒステリーなどになることはありません。しかし、何時も笑つて居るやうになるには、それと精神修養をしなければなりません。佛敎を信じて、佛の御方に頼るとか、神様を信じてそれに、救はれて安心するとか云ふことも、一つの方法として、非常に好いことだと思ひます。しかし、それ以外に、自分で自分を修養して、何時もこんなことが來ても、笑つて相手になることが出来るやうになりたいものだと思ひます。

笑ひながら暴風雨と戦ふ

私はよく生徒達に向つて、『あなた方が、學校を卒業してお嫁に行くのは、船に乗つて廣い海を渡るやうなものです。何時そんな、暴風雨に逢ふか分りません。其の時『私はどうしてこんな目に逢ふのか』と弱い音を吐いて、力を落すやうではいけません。一難毎に力を増すといふくらゐ、笑つて其の暴風雨と戦つて行くやうにならなければいけません。』と言つてをります。又さういふ難義なことを、自分の力で成遂げるといふことは、誠に愉快なことで、昔の歌にも、『憂きことの尙此の上に積れかし、限りある身の方ためさむ』と云ふのがあります。私どもも、かうした心懸で居れば、何時も笑つて暮すことができます。

愛嬌は美人を造る

どんなに美しい人でも、つんとして居て、にこやかなところがないと、何となく物足りないやうな心地がします。其の反對に、顔容のさう好くない人でも、何時も

にこ〜笑つて居るやうな顔をして居ると、何となく親しいやうな心地が致します。美しく愛嬌のない人よりも、さう美しくなくても、晴れやかな愛嬌のある人の方が、つと美しく見えます。物事のよく出来る人でも、『私はえらい物議でございます。』と云ふやうな顔をして居る人は、幾らえらくても尊敬されません。平生にこ〜こして居て、物議だと云ふことを少しも見せないで、いざと云ふ時に世人を驚かすやうなことをする人は、人に敬はれもし、好かれもするものでございます。

子供の好くので分る

いくら男でも、餘りむづかしい顔をして居る人は人に喜ばれません。子供達の話聞いて居ると、『あの人は本當に恐い顔をして居る人だ。私は、あんな恐い顔をした人はいやだ。』などと云つてをります。少しも考のない子供でさへ、人の顔を見て好きだとか嫌ひだとかいふ感じが、起つて来るものだと見えます。他家へ行つた時に、可愛らしいお子さんでもお出でになると、子供の好きな人は、直ぐ手を出

して抱いて見たりなごします。平素子供の嫌ひな人でも、お愛想の積りで、「いいお子さんですこと、私にもいらつしやい。」と手を出します。すると、笑顔の人の所へは、お子さんも喜んで参りますが、むつつりした人の所へは、どうしても参りません

交際の秘訣も愛嬌にあり

これは愛嬌のない人の損な所でございます。殊に婦人には、最も愛嬌が大切ですが、愛嬌のない婦人は、人中へ出て、上手に交際することが出来ません、又家庭の人になつても、何となく淋しいものでございます。さうかといつて、餘り笑ふのもお品がなくて、いやな感じが致します、婦人が大きな聲を立て、笑ふのは、餘程可笑しいことでもない限りは、慎むべきことでございます。人前で笑ふ時には、ただにこやかにさへして居れば、決してお品の下るものではありませんし、況して人に不快な感じを起させることもありません。但し若い婦人は、譯もなく笑ひたがるものです。さういふ場合は能く注意しないと、側にゐる人に不快な感じを起させること

があります。

心配も苦にならず

私の家には大人ばかり八人居ります。其の八人の大人が何時も笑つて暮してをります。これは各自が總てのことに満足して居るからで、たまに不足に思ふやうなことがあつても、『私には、これ位のこと相當なかも知れぬ。さうくよ／＼することはない。』と思つて、互に我儘を云ひ合はない爲であらうと思ひます。それに、私は、怒ることが嫌ひですし、人に怒られるのも嫌ひです。腹の立つことがあつても、怒りに任せて直ぐ怒つてはいけません。他の可笑しいことや、楽しいことなどを考へるやうにするのです。さうすれば腹の立つたことなどは、何時の間にか忘れて仕舞つて、陽氣な心持になつて來ます。常に心が晴々して居る位、愉快なことはありません。心が晴々して居れば、少しぐらゐ心配なことがあつても、さう氣にもせず用事を片づけて仕舞ふことができます。

老人も大に注意したし

若い人たちと一緒に居ると、時々自分の氣に入らないことがあります。私は、さういふ時は、それが悪いことでない限り、『これも世の中が變つたので、仕方がない。』とあきらめて、若い人達の好きなやうにさせて居ります。其の時、自分が年長者だと思つて反對すると、人に悪く思はれた上に、自分まで氣を悪くするやうになります。それでは互につまらないから、成るべく人の云ふことに逆はないやうにして居ります。かやうにしてさへをれば、家内は至極圓滿に參ります。老人の苦い顔は如何にも恐しく見えますから、私は絶えず笑顔をして居ります。私が笑つて居れば傍の人も怒るわけに行かないから、皆して笑つて居るやうになります。

今後の母に望む

學校は家庭次第也

物質的文明の進むに伴れて、世は益々複雑となり、危険となりますから、人の母となつては今後益々確りして、嚴格なる教養をせねばなりません。學校では如何に修身を教へ、訓練を嚴重にしましても、母たる人が、嚴格なる躰けをなさぬと、之を活すことが出来ぬのみならず、眞の教育の効果は舉りませぬ。例へば學校から歸つてからは、かうせねばならぬ、日曜、祭日はかうせねばならぬ、暑中とか、年末年始の休暇はかうせねばならぬと申しましても、母たる人にして放任主義を取られて居たならば、丸で其の効果は舉りませぬ。私共は、多くの女生徒に向つて、無斷に外出してはいけません、朋友同志で旅行するとか、朋友の家に宿るとか、監督者なき避暑避暑は、禁物であると申しましても、果して之を實行するや否やは、母親次第であります。

家庭に於ける躰け

學校では、多數のことですから、本人の性行、習癖、思案、感情は、さう詳しく

分りませぬ。之を熟知して相當の方法手段を講せらるゝとは、母たる方の任務であります。無斷で外出するとか、無斷でなくとも、朋友同志又は一人で外出する、旅行する、宿泊すると云ふやうな所から、終に誘惑の弊に掛り、墮落の淵に沈むことのあるのに、母たる人は、之を豫防することに注意を缺き、大抵のことは、子女任せとし、結果の悪かつたのを見て、始めて驚き、或は朋友を怨み、相手を恨む如きことがあつてはなりません。彼の避暑の如きは、私共八十に近い年齢に達しても、未だ曾て必要を感じませぬ、避暑の必要な方は、生活に餘裕ある所謂上流の人であるか、又は病人、子供、老耄の人に限るのであります。それに、嫁入り前の娘を、避暑避暑に遣る如きは、考へ物ではありませんか。

順境を的にする勿れ

避暑避暑に限らず、休暇にはちやんと休ませ、平素の勉學を慰勞る如きは、如何にも、子供を可愛がるに似て 實はさうでないのであります。我が國民中、果して

夫婦親子で避暑避暑が出来、日曜、祭日と云へば、物見遊山でもして差支ない人が多くありませうか。幸に富貴の家に成長なされた令嬢諸君であつても、將來果して、同等以上の順境の家に嫁入られぬとも限りませぬ、假し結婚當時は順境であつても、人の行末は分りませぬ。それに何でも、極順境の人の眞似をして、處女時代に樂をすることは、考へ物です、假し富貴の方に嫁入つても、さう遠慮なく、旅行などする方は、至つて少からうと思ひます。

幼時より躰けよ

婦人の修養としては、學校丈では、どうしても不足であります。家庭教育で大に補ふべきは申す迄もありませぬ。されば、高等女學校卒業後、短くとも一年以上はみつしり娘を躰けて家事に上達させねばならぬと申しましても、人に嫁ぐ縁は、果して、女學校卒業後一二年以上に限りませぬ。假し急いでも、何かの爲に數年間良縁のない人もあれば、卒業匆々あるのもあれば、未だ卒業もしないのに、嫁入らね

ばならぬ方もありませう。されば母たる人は、妙齡になつたら、何時嫁入つても差支ないやうに、其の幼き時より、平素油断なく躑けて置くことが、肝要であらうと思ひます。

今後の母たらん方へ

追々世の中は面倒になりますから、今後の母たらん人は、一層確りなさらねばなりません。危険に遠ざけるのと、近寄らすのとは、母親の心持次第であります。今後の母親たらん人は、大抵女学校の課程を履んで居らるゝから、今迄の母親の如く無學文盲と云はれて、馬鹿にされるやうなことはありませんが、其の代り意志が強固で、感情が圓滿でない、子女の教育は出来ませぬ。

緊要なる家庭訓

娘を教育するには、種々の方法もありませうが、家を齊へ治めることを主眼とせねばなりません。此の家を齊へ治めると云ふことさへ、心得て居つたなら、良人に

仕へ、舅姑に事へ、小舅小姑に交り、子供を育つる上に於ても、面倒がなからうと思ひます。此の本が出来ましたら、未は自ら出来るのであります。若し一生懸命家を齊へ治めようとしたならば、奢侈贅澤に耽ることも出来ませぬし、虚榮虚飾を事とすることも出来ませぬ。

明治維新當時を偲ぶ

近來は『新しい女』と云ふが流行るやうですが、それは女の方も悪いのですが、男の方も悪いかと思ひます。こんな人の出るのも、大正の維新で、世の變り目であるから、そんな女も出ること、思ひます。遠く明治の維新に遡るに、徳川氏倒れ、世は維新となつたときには、何でも舊を捨て、新を尙び、變つたことをすることを好いとして居る。私共は實際に目撃したのですが、大名の姫様にして、惜氣もなく緑の黒髪を斬つて、男の如く斬髪となり、得意満面の人もありました。斯るときには國粹保存どころか、從來のことは一も二もなく破壊せられて、變つたことが好まれ

ました。當時の新しい女も、今の新しい女に譲らなかつたのであります。勢ひ此の如くなれば、種々の弊害も生じたが、中にも女の斬髪が流行して、後家の外には、警察で之を干渉し、公の許可がなかつたら、女の斬髪は出来ないと言ふことさへありました。又繪を描くにも、書を書くにも、至つて亂暴な變つた風が流行して、眞面目な人は困りました、何でも眞面目なものは、陳腐だとか、拙劣だとか云はれて、却つて肩身が狭いことさへありました。無論、漢籍とか道徳とか云はれるものは、度外視されたのであります。

母たらん方に望む

大正の今日も随分甚だしいので、表面明治維新の時程でないとしても、危険思想は何時熄んで、仕舞ふか分りませぬ。幸に一時の流行であつたら、宜しいのですが……。されば已に母たる人、將に母たらん今日の處女諸君は、大に修養し、(修養には、漢學も最も宜しうございます)大に警戒し、そんなことが起つても、確固とし

と動かない精神を以て、日々の務めを全うせられんことを望みます。

現代の子女教育

子女教育の根抵

古へより孝は百行の源、萬善の本と申しまして、親に孝行する程の人は、屹度、兄弟に友に、夫婦相和し、大君に忠を致し、人に親切なるものであります。所が、近來孝道が振はず、忠孝仁義の教を以て、舊弊の如く思つて居る人の少くないのは、實に慨歎の至であります。そして偶々孝子烈婦の新聞雑誌などに顯はるゝ所を見るに、年寒うして松柏の凋むに後るゝを知り、身貧にして初めて孝烈の行ひが現はれたやうであります。然るに孝道と云ひ、婦徳と云ひ、境遇であるとか、地位に依つて行はるゝものではありません。畏くも十善萬乘の大君であらせらるゝ、今上陛下并に皇后陛下に於かせられては、殊更、御孝心深くおはし、御母上様、即ち昭憲皇

太后様の御命日には、兩陛下とも至心に參拜相成ると洩れ承つて居ります。降つては故伊藤公と云ひ、大隈侯と云ひ、豪方は何れも、孝心が深くあられると承りて居ります。左なくとも『身をたて、道を行ひ、名を後世に上げ、以て父母を顯すは孝の終り也』でありますから、孝道は順逆二境に依つて、難易廣狹の差別のあるものではありません。殊に子供は、未だ社會に出でないから、他の諸の善をすることばむづかしうありますから、特に親孝行のことを注意せねばなりません。

冥利を虞れたし

近來は實用實用と云つて、目前のことばかりに注意するやうになりましたが、物は隠れた處、遠い處にも注意し、心配しないと、其の成功を得、幸福を得ることは出来ません。同じ孝行であつても、此の世に在る父母祖父母に孝行を盡す丈ではないけません。父母、祖父母其他の此の世にないときは、能く法事追善を營むは申す迄もなく、毎年又は毎月の命日には、能く香華を供養し、出来る丈の馳走を差上げた

いと思ふ。孝道も、こゝに至らねば、駄目でありませう。又婦道としても、此の邊は大切なものであります。例へば良人死なば、能く其の菩提を弔ふは申す迄もなく、若し後妻に入るときは、先妻の菩提を、能く弔ひ、其の命日には、香華を供養したものです。父母祖先のことを聞くのは、結婚後、第一着の仕事と存じます。

今日の風潮は如何

今日孝道は廢れ、陽徳ばかりを尙ぶ結果、國民として、甚だ不道徳、不秩序の有り様となりました。大権の一部に與ると云ふ代議士の選挙の競争の有様は、如何でありませう。戸別訪問とか、金品などを蒔いて、強て、選挙して貰ふと云ふ有様ではありませんか。政黨政派は、自黨自派の利益を知つて、國家の爲を計りませんやうです。辛うじて組織出來た内閣を、矢鱈に倒さうとして居りますが、代つても、今の内閣以上のものが、出來上りませうか、上りますまい。何でも打ち壊さへすれば、良いではいけませんまい。今日は御承知の通り、世界の大戦争を控へ支那米國

の兩隣のことも、さう容易く参りません。輕跳浮薄のことは、最も面白くないと存じます。

子女ご母の修養

どうしても、子女の教育は、母親の主掌する所であります。母たる人が、婦徳を備へ、子女を能く教育しなかつたら、どうして良い國民が出来ませう。古へより、母の賢明なるときは、屹度其の子供も賢明になります。母の手一つで育てた子女でも、母さへ確りして居たならば、却て豪い人物が出来るではありませんか。

感心な未亡人

良人の遺業を完成す

以前私どもの塾に居た人で、矢張私の門下生の一人ですが、井上瑞枝といふ人がありました。塾を出てから、藤井といふ文學士に嫁ぎましたが、藤井さんは、佛蹟

を調べる爲に印度へ行つて、とうとう彼方で亡くなられました。藤井さんは、熱心に佛學を研究された人で、佛敎辭林編纂に着手されましたが、未だ完成しないうちに亡くなられました。其れを瑞枝さんは、其の儘にして置くのも残念だと思はれたのでせう、良人の遺業を繼いで、長い間苦心して、遂に完成されました。良人の事業を了解することさへ出来ぬ婦人が多い今の世に、幾ら學問があるとは云へ、良人の遺業を繼いで、彼の浩瀚な著述を完成されたのは、並大抵の婦人には出来ぬことだと思ひます。

二十五から寡婦で暮す

其ればかりでなく、今日までの瑞枝さんのされたことは、確に一般の人と變つて居ると思はれる節が多うございます。瑞枝さんが良人に亡くなられたのは、二十五六歳の頃でしたが、其れから四十五六歳の今日まで、獨身で暮して居られます。良人に別れた頃は、未だ若いものですから、親や親戚の人々は、頻に再縁を勧めたさ

うですが、瑞枝さんは、どうしても獨身で過すと云つて、承知しませんでした、それで、再縁を勧めた人々も、止むを得ず、瑞枝さんの希望通りになさいました。

利慾の境を解脱した婦人

再縁を勧められた時に、瑞枝さんの良人の叔父さんが、瑞枝さんの御氣象が、如何にも確りして居られるのに感心されて、瑞枝さんの生活費を、全部貢ぐことになさいました。そして着物のやうなものは、瑞枝さんの生家から来るさうですから、衣食の心配は少しもありません。今では國府津の小幡と云ふ所に、一人で住んで居りますが、其の生活は、よほど變つて居ります。自ら其の住居を撫松庵と云つてをりますが、全く利慾の境を解脱して仕舞つて居る所が、面白いと思ひます。

幼い時から面白い手紙を書く

瑞枝さんは、私の學校が神田の仲猿樂町にあつた時分に來られた人で、其の時は八歳位でした。其の頃から、同じ手紙を書いても、他の人よりは面白く書きました

文章の上手な人でした。瑞枝さんの文章を集めた『亂れ雲』といふ書物が出版されて居ります。あれなどは、自分で、出版したくないと云つて居られましたが、本屋の方でどうか出させてくれと、八釜しく云つて來るので、とうとう断りきれずに、出版することにしたらと云ふことです。

他力本願を信じて疑はぬ

固より利慾の念の薄い人ですから、文章を書いて名を賣らうとか、金を儲けようとか、そんな吝しい心を持つた人ではありません。唯好きな道ですから、文章を書いて、自ら慰めてゐるのです。今では、島地黙雷さんの門下生になられて、一向宗を信じて居ります。一向宗と云ふのは、他力本願に依つて安心決定するのですが、瑞枝さんは、他力本願を信じて疑はぬ人でございます。其の信仰が瑞枝さんを、益々利慾の觀念から遠ざけたのでございます。

肺病に罹つても悲觀せぬ

瑞枝さんの良人は肺病でしたが、瑞枝さんにも、矢張其の病があります。病のある人は、何方でも大抵悲観して、世を果敢ないものにして仕舞ふのが、お極りですが瑞枝さんに限つて、そんなことはありません。逢つて見ますと、非常に賑かな人からしくと笑ひながら、嬉しさうに話して居りますから、どうしても病氣のある人とは思はれません。身體の達者な、樂天的な人のやうに思はれます。其れは、つまり他力本願の力で、悟を開いて居られるからだと思ひます。

女中と二人で二間の家

私は、今年の一月に李子と二人で、國府津へ行つた序に訪ねて見ました。家族は女中と二人きり、家は新しい建築で、八疊と六疊の二間でした。大家さんが、瑞枝さんの爲に新しく建て、呉れたのださうです。私はちよと寄つた丈で歸る積りでしたが、久し振りだからと云つて、非常に喜んで、是非泊つて行けと勧めました。私は、『泊つても構はないが、夜具があるのか。』と聞いて見ますと、『四人前だけあります。』と云ひましたから泊りました。

面白い寄せ書きの屏風

瑞枝さんの家には、屏風が一雙ありました。其れには、いろいろの人が思ひくのことを書いて殆ど書き盡してありました。私にも、記念に何か書いて呉れと申しますから、よく見ますと、中央に島地黙雷さんが、『撫松庵』と書いてありました。其の松に因んだものでせう、次には竹の畫が書いてありました。私は、梅が好からうと想つて、其れを書きました。丁度松竹梅になつた譯です。瑞枝さんは非常に喜ばれて、『私は、財産も何もないから、死んでも遺して行くものがない、此の屏風が唯一の形見だ。』と云つて居りました。

方々から畫を頼まれて困る

瑞枝さんは、畫も描きますし、書も書きます、書は此の頃はペンばかりださうですが、畫は方々から頼まれて困ると云つてをりました。實際瑞枝さんは、自分の心

を樂ませる爲に、畫を描いたり、讀書したり、文章を作つたりするので、それで名を賣らうとか、又は偉いものにならうとか、思つて居るのではありません。瑞枝さんは、一切衆生のことは、皆阿彌陀様がして下さるのだと云ふ堅い信仰の上に立つて、此の世を渡つて居られるのです。

未亡人でない可亡人なり

瑞枝さんは、尼にこそなつて居ないが、自分では髪を落して出家したやうな心持で居るのです。世間には、随分熱心に宗教を信仰なさる人もありますが、瑞枝さんのやうに、塵世から解脱して居る人は、珍らしからうと思ひます。其れに、あの人は、自ら可亡人といつて、殆ど雅號かなどのやうにして居ります。普通の人は未亡人と云ひますが、瑞枝さんは、自分は今此の世の人ではない、疾に死んだ人であると云ふ所から、さう云つて居られるのです。未亡人とは、未だ死なない人と云ふ意味ですから、大分意味が違ひます。

嫁に遣る迄

社會の複雑と母の責任

申す迄もなく、今後社會が、複雑になつて参りますれば参ります程、生活難は更に一層甚だしきを加へることでございませう。此の複雑多難なる社會に處して、優勝の地歩を占め、其の地他を保つて行かうとするは、並大抵の事ではありません。されば人の妻たり、人の母たる人は、餘程鞏固な意志と、堅忍不拔の精神とを以て千辛萬苦に遭遇しても屈せず、却つて之れを打破つて進むだけの氣力が、必要になつて來るのであります。そしてそんな人を教育し、そんな人を作るのは、一に母親の責任であり、義務であります。今後の母たらん人は、必ず此の點に注意して居らなければならぬ事であらうと存じます。

鞏固なる意志と圓滿なる感情

尤も今日及び今日以後に於て、母たらんとする娘は、大抵高等女学校の出身でありますから、昔の如く無學の人も、少いのですけれども、社會が複雑になるのに伴つて、假ひ學問があり、識見があつても尙ほ更に注意し、涵養せねばならぬ點があります。夫れは即ち、鞏固なる意志と圓滿なる感情とであります。私が今日まで、現に母親になつて居る人、及び未だ孰れへも嫁がぬ娘さん達を見ますに、ごうも此の精神に缺けて居る人が、却々尠くないやうに存じます、そして學問あり、立派な識見を持つて居らるゝ方々にも、却々多く見受けるのであります、それで私はごうにかして此の心懸だけは、心の中に持つて置いて頂きたいと思つて居るのであります。さもなければ、兎角當初の一念を貫徹することが、難からうと存じます。

現代の娘さんご家庭の實務

特に現在の若い娘さん達には、此の精神の缺けて居るのを發見するのであります。私達も多くの娘さんを預つて居りますが、娘の教育と云ふものは、却々至難なこと

でありまして、當局者でさへも頭を痛めて居られるのであります。然らば娘はごう云ふやうに、教育したならば宜しいかと云ふに、私の考へでは、ごうしても學校だけでは、不完全な様な氣がしてなりません。ごうも未だ不足の點がある様に思はれてなりません。此の不足の點は、是非家庭の力を借りて、家庭教育を以て補はなければなるまいと存じます。それで高等女學校を卒業させても、あと一箇年以上、みつしり娘を養つて家庭の實務に携はらせ、其の事を練習させ、上達せしめねばなりません。ごうも家事に熟達して居らない娘は、他日家庭の主婦になつた時に、實に困るのであります。

現代の若婦人の理想

今の若い娘さんは、時に生意氣な口を利くことがあります。「私は自ら手を下して勝手のことをしたり、おさんごんの代理をする様な所には嫁ぎません」と、是れは大變な間違であります。是れからの世に處する人は、こんな考へを持つて居つて

は、浮世の荒濤と闘つて行く譯には参りません。又幸にして自分自ら手を下す必要がなく、おさんに勝手のことを、一切任せ身分でありましても、又奥女中を雇つて置かれるにしましても、自分自身が家事に熟達して居らなければ、其の模範を垂れることが出来ません。そして自分が其れを知つて居らなくては、是が非でも、雇人のしたまゝにして置かなくてはなりません。

何時でも差支ないやうになる

又人に嫁ぎまするのも、必ず女學校を卒業して一年内に嫁がねばならぬと云ふ事はありません。どんなに急いでも數年の間良縁のない娘もありますれば、卒業早々良縁のある人もあり、時にはまだ在學中から貰はれる人もあります。そして其の人達は各自の境遇によつて、早く嫁入らねばならぬ人もあります。それで今日の母たらん人は、娘が妙齡になつたならば、何日何時にても嫁入らしても差支へないやうに、教養して置くのが肝心であります、それが義務であらうと存じます。故に、是

れを油断なくやつて行くのが、必要であります。

家を齊へるを主とす

借て娘に躰けるには、種々の方法もありませうが、家を齊へ、家を治むることを主眼とせねばなりません。此の家を齊へ、家を治むると云ふ事は、一面に於ては良人に仕へ、舅に仕へ、小舅小姑に交り、子供を育つることまで及ぶのであります。家を齊へる事が上手になりますれば、則ち其他の事も容易く出来るのであります。『本立て始めて未正し。』家が齊ひ、家が治まらねば、其他の事は、決して出来るものではありません。若し又一生懸命に家庭を治むることに苦心しましたならば、奢侈費澤に陥るやうなことはありません。人と衝突することなども決してなからうと存じます。私は是れだけのことは、是非とも娘を嫁入らせる以前に、習得させて置きたいものだと思ひます。孰れの親々も此の心懸だけは、是非なくては叶はぬことであらうと存じます。さもなければ其の娘は、必ず不幸な人と云はなければなりません。

時代と母親の責任

つまり今日は、何かにつけ複雑なる社會であり、又頗る危険なる世の中であり、特に危険思想の潜在して居る時代でありまして、常規に反した人も少くないやうでありますから、既に母たる人、將來母親たらんとする人は大に修養し、警戒して例如何なる問題が起らうとも、毅然として動かない、鞏固なる意志を養ひ、温かなる情愛を以て、人に接するの徳を養はねばなるまいと存じます。

思ふに我が國家は家庭を基本として成り立つて居ります。即ち家族制度が國家の基本であります。此の點は西洋の個人主義の國家と、異なる所であります。果して然らば先づ家庭を治むることは、即ち國を治むる始めであります。故に國を治むるには、先づ己が家より治めて行くやうにしなければなりません。己れの家を治めんとするには、先づ子女の教育を完成して行かなければならぬといふことに、なるのであります。

流行と一家の經濟

流行の變遷と一家經濟

現今男子の禮服は、略一定して居りますが、女子の禮服は見受けます所、一定して居りません、餘程雜駁な有様を呈して居ります。私はそれを一定して、欲しいものと思ひます。此の事は、私の年來の希望であります。若し人々には、其れが容易に實行が出来まいと思ひます。此の節の流行は變化が激しいもので、昨年新調した紋附は、今年になると、もう着ることが出来ない、來年は又どうなることかと、怪まれるやうな有様では、奥様や令嬢の着物の新調の爲に、大抵の身上は傾くやうな次第で、其れも西洋のやうに、澤山の持參金でも持つて來た奥様ならば兎に角ですが、今日の日本の奥様達は、大抵は御主人に強請つて、拵へて貰はなければならぬのであります。此の流行を追ふと云ふことは、一家の經濟

に取つては、實際困ることではありません。けれども此の厄介なことも、婦人の禮服さへ一定して居れば、全然無くなることが出来るであらうと思はれます。

昔の禮服は規律正しい

昔は紋附の色目と云ふものは、整然と定つて居つたもので、即ち黒、赤、紫、檜皮、鶉等の數種に、紋附の色は極つたもので、今日のやうに、去年は小豆色であつたが、今年は何色が流行ると云つたやうに、年により、色目が變るやうなことは、決してなかつたものです。それで其の定まつた色も、皆それと季節によつて、何月何日迄は、何色といふ規定があつて、若い人でも、年を老つた人でも、其の季節になつて、皆同一の色を着たものです。

それから祝儀の時の禮服は、夫婦揃つて居る婦人ならば、幾歲くにならうとも、必ず總模様の紋附を着用すべきもの、又後家ならば、幾ら若くとも、必ず模様なしで、偶には地紋織のものを着る人もある位のものでした。又葬儀の折には、無模様の白無垢と、そんな風に萬事に亘つて、一定したものですから、同じ物が古くなつても、構はずに着ることが出来たものです。其故、今のやうに、年々歳々流行を追ふて、紋附を新調しなければならぬと云ふやうなことは、昔は決して、なかつたものです。

禮服を是の如く定めよ

されば今日の如き奢侈の増長した弊風を矯正しようとするには、昔の禮服の規定を彦酌して一定することにすれば、可いと思ひます。先づ總模様の黒紋附に、白の下着を祝儀の時の禮服とし、無模様白無垢を、葬儀の時の禮服と云ふ風に一定することにしたならば、一家の經濟の助かることは、どれ程だか知れまいと思はれます。併し、是れは若い人達の、必ず不賛成なことでせうけれども、今日の奢侈の風が益々増長して、流行計り追うて居た日には、大抵の身代ならば、到底立ち行くまいと思はれますから、若い婦人方も、此の邊はよく氣を附けられて、身の行末の爲、又

は我が一家の爲に、奮つて此の禮服一定の事に賛成して欲しいものです。こんなことは先づ第一に上の方から、手本を示されたならば、自然下々も之に見習うて、今日の弊風も、漸々改まつて行くことであらうと思はれます。

被衣の復興を望む

事の序に申して置きたいことがあります。以前は婦人が皆被衣といふものを用ゐました。あれは實に優美なもので、地味な色合の絹に、家の紋散し、若い人には真紅の總、年増以上の婦人には、紫の總などが下つて、それを被衣針と云ふもので頭に止め、それで風や塵芥を避けたのです。被衣を被いて外出すれば、髪が塵芥に汚れることも少く、又多少髪が亂れて居ても、目立たないのみならず、此の被衣を着ると、婦人の姿が、非常に優美に上品で、唯では左までいらない婦人も、大層な美人のやうに見えたものです。東京のやうに塵芥の多く飛ぶ處では、第一塵避けとしても、至極都合の好いものであらうと思ひます。地質は絹と極つて居るので、

外して疊めば、ほんの一寸したものに過ぎませんから、決して荷厄介になるやうなこともありません。西洋のペールなどよりも純日本風で、一層優美ですから、此の被衣を復興したら、どんなに優美で宜からうかと思はれます。

雛節句と家庭

雛節句の由來

昔し行はれた五節句の中でも、今日盛に行はれて居るのは、三月の節句と五月の節句とで、之が女の子と男の子とに配されて居ります。女の子の節句となつて居る三月の雛節句は、詳しいことは存しませんが、古く伊弉册尊伊弉諾尊を祭つたもので、それから、兩陛下に擬へたもののやうに承ります。

雛節句と皇室

今日では、昔の御殿を造り、所謂内裏様の下には、侍従官女を始め、いろ／＼の

人形を飾り、什器としては、家庭に要する種々の道具、料理其の他の世帯道具をも揃へて、其の家相應に、昔の御殿並に家庭を偲ぶと云ふことになつて居ります。今日では昔程、丁寧には飾られて居りませんが、それでも中以上の家庭の雛節句には、内裏様の脇に、陛下の一時も離し給はぬ御玉を入れた唐櫃あり、下段には御三柵厨子、黒棚などあり、自ら皇室を尊び、祖先を慕ひ、昔を偲び、家庭の實地を學ぶやう出來て居ります。

公卿の雛節句

私は堂上家の雛節句を見知つて居りますが、古へ堂上家と云つても、五攝家あり、大臣家あり、三位以上、五位以上、殿上人などの區別があり、家柄に依つて、男ども冠も違へば、装束も違ふ、束帯、扇、履其の他、違つて居ります。十二一重とも云ふ、五衣も違へば、家柄に依りて、何も彼も違ひますので、内裏様にお着せ申すものは、其の家々で家の殿様奥方の用ゐられるものを、裸人形に着せましたのでありま

す、藤原家は御承知でもありませうが、九條様が御本家でありましたが、祖流と云つて、御分家が澤山ある、夫々家格が違ひます。お召物と云つても、頭の頂きから、足の爪先迄違ひ、従つて什器迄差別があるので、其の御殿に勤めても、容易に分りませぬ。家人でありながら、己が家のことが分り難いのを、雛節句で、すつかり覺えるのであります。そして姫様が、何事も主として遊ばされます。例へば衣桁におかけになるにしても、お料理の指揮でも、お客さんを待遇ふことでも、何でも遊ばします。深窓にお育ちになつた方も、雛節句で柄の名、實地のことを覚え、活きたる家政學の練習をなさつたのであります。嫁入道具も、皆揃つて居りますから、此等のこともお覚えになつたものであります。又琴其の他の合奏もしたものであります。

宮中の御儀式

今日でも、宮中で何かの時は、昔のまゝの御儀式があるやう、承つて居りますが、昔の人は日に少くなり、假ひ生存して居ても、そんなことに注意して居た人が少い

と見えまして柄の名さへ分らないので、差支へらるゝことがあるさうであります。例へば冠の巾子にも、飾り心葉にも山吹あり、櫻あり、藤あり、葵あり、そして何處に挿して良いか分らぬと云ふことへあるさうであります。

武家の雛節句

武家の方は、徳川様などは、最もお詳しいことでありますが、昔し、私は一二回武家に呼ばれたことがございます。それは姫様始め、婢女に至る迄、緋縮緬其他赤い衣服づくめで、黒緇子の帯を締め、御客様にも地赤の裃と云ふ有様で、實に立派なものでありました。九重のことは申すも畏し、只今でも、宮様方は雛節句を遊ばします、華族より平民に至る迄、分相應に雛節句をするに云ふことは、公の祝祭ではありませんが、能く昔を偲ひ、祖先を思ひ、皇室を尊び、家庭を温め、少女は申す迄もなく、男子老人迄も楽しむものでありますから、長く此の風習儀式を遺したいと思ひます。

第三編 實驗の卷

經驗より得たる教訓

父母の言が身に染む

私共には、自己の經驗より得たる教訓など、取立て、申す程のことはございませぬが、回顧すれば、早七十有餘年の昔、未だ四五歳の頃でありました。両親が私に向つて、よく申しますには、跡見家は不幸にして没落して居る、眞に残念なことである。お前は女ながら奮發して、跡見家を盛立て、呉れねばならぬ。實に跡見家再興の任は、お前の肩に掛つて居るのだと云ふやうなことを繰返しますので、私は幼心にも大に感激し、ゆくゆくは屹度、さう成りたいものであると、深く念つて居ました。で、四歳の時に書を習ひ初め、次第に讀書、算術、いろ／＼の女藝にいろ

しみ、十二歳の時から繪畫を習ひ初めました。斯く學問書畫又は女藝に一心を凝し漸く少女時代を了るか否かで、父の開いて居る私塾で、子弟を教へることになりました。

父母に孝せんこのみ

此のやうに、私の幼少の時代は、父母の命を奉じて、學問書畫に親み、所謂「身を立て道を行ひ、名を後世に揚げて、以て父母を顯すは、孝の終也」と云ふことのみ期し、若い時から、女弟子を教へましたので、結婚すると云ふ氣にもならず、只管目的に向つて、進んで居たのでございます。

世の物騒に驚かず

私は天保十一年の生れで、未だ幼少の頃は、世の中が太平でありましたが、稍々年をさるに随ひ、追々物騒になりました。安政の時から文久にかけて、世は益々亂れて参りました。京都に七卿落あり、澤さんは生野銀山で、中山侍従は十津川で、

孰れも兵を擧げるなど、随分騒がしい世の中でありましたので、學問をする人も、落着いて居れぬ、殊に大阪などは、非常に騒がしいので、難を他國に避ける鹽梅でありましたが、私は斯る世の中のことには頓着せず、せつせと學問書畫の上達を計り一方には子女の教育を勉めました。一體私は木津の生れで、一時修業の爲、京都に出て居ること二年、文久の頃には、大阪中之島に寓して、後藤松蔭先生の講義などを聴き、随つて學び、随つて教へると云ふ有様でございました。

六十年の教育生活

それから慶應の頃には、京都に参りまして、矢張塾を開きました所、聽て九條公御後室様を始め、公卿堂上方のお姫様や、彼方此方の娘達に、書畫學問の稽古を致しました。尋で明治になつてから、東京に引越すこととなり、初め築地に居り、尋いで小川町に居り、終に只今の小石川柳町に参りました。其の跡見女學校と申すやうになりましたのは、宛も明治八年でございまして、其の時は、私立女學校は更に

なく、官立で竹橋女學校、即ち今の女子高等師範學校が、同じやうな頃に出來たばかりでした。私は、父母の言が、何處迄も身に染みて、一身を教育に委ね、終世獨身生活を貫きましたのでございます。固より學問や教育を、無上の快樂と存じ、多くの娘を自分の子のやうに致しましたので、前述の如く、初めより結婚する氣にもなれず、寂寞の感に襲はれたなどのことはございません。又中途にして、目的の變更を望んだこともございません。全く身を教育の爲に供へたのでございます。

教育は世態に應ず

回顧すれば、身を教育事業に委ねましてから、早六十年になりました。志は昔も今も露變りはございませんが、時勢の推移は實に甚だしく、世態も人情も變遷して参りましたので、學問の方法、教育の仕方も、自然大に變つて参りました。で、私共の教育の方針も、世の發展に従つて進んで参りました。昔は讀書、算術、作文、書畫、裁縫の學科に限りましたものの、今日では、種々の普通科が出來、其の教育

の方法も、注入より開發的に進み、智情意及び身體の教育迄、拔目なく行ふことになりました。

祖先崇拜を本とす

此の如く必要の學科なり、教育の方法も、大に變化したものの、何時も變つてはならぬものは、道德の修養、國民性の發揚でございませす。幾ら西洋に好い所があるといつても、父母は第二として、夫婦手を携へて遊び歩くなどのことは、我が國の人のなすべきことでございません。私共は飽迄家族制度の美點が廢れないやうにし、祖先を崇び、國體を重んずるやうにせねばならぬと思ひます。其の祖先崇拜の念は、人倫道德の本源と思ひますから、益々此の精神を發揮したいと思ひます。

今日の流弊と婦人の不幸

近來の流弊としまして、何でも難きを捨て、易きを喜び、若い婦人ならば、學士高等官の肩書あり、家は貧乏でなく、舅姑小舅小姑がなく、流行の衣服の買ひ得る

處に行きたいと望んで居る人が、多いやうでございしますが、人の世に立つには、男であれ、女であれ、さう濡手で粟と云ふ譯に参りません、一家の主婦となつて、良人舅姑の世話は勿論、子供を立派に教育し、日々時々の經濟を程よくし、家を治め客に接し、人に交はるなどのことは、さう容易く出来るものではありません。斯る天職を十分に果さんことを勉めずして、却つて虚榮虚飾に流るゝなどは、以ての外でございします。私が常に弟子共に申しますには、嫁入りしてから、直ぐ思ふやうに行かぬとて、不平をこぼしてはいけぬ、短くも十年の日子を要するが、若し十年で行ずば二十年三十年の中に、よくしやうと云ふ覺悟でなければならぬと申します。それを一寸思ふやうならぬからと云つて失望落膽し、或は離婚をし、或は墮落などし、又はヒステリーに罹り、精神錯亂し、果ては自殺でもするに至つては、實に慨はしい極であります。どうぞ日本婦人として、斯ることの無きを希望するのであります

目的は良妻賢母

それから私の常に思ひますのは、婦人は良妻賢母を目的とせねばなりません、國家の經濟状態、日一日と切迫したる今日、良人が働くからと云つて、家事のみ勉めて満足して居てはなるまいと思ひます。何か一藝を習ひ覺えて、それで良人の生産經濟を助けねばなるまいと思ひます。世間には、さう子供もなく忙しくないのにこれと云ふ活動もせず遊び暮して、お出でる方もあらうと思ひますが、こんなことで、どうして此の經濟逼迫の世に處して行かれませう。婦人が何か一藝を備へて働くこと云ふことは、國家の爲にも、非常に有益なことで存じます。若し夫れ今日の婦人にして、虚榮虚飾をせず、質素儉約にして、且つ大に働いたなら、國富は期せずして得らるゝことが出来やうと思ひます、殊に未亡人の方に申し上げたいのは、未亡人だからと云つて、身體の利く年でありながら、良人の遺した財産で衣食し、時に遊樂をこゝししないで、何か、家の爲、社會の爲、お働きになることを希望します。

身體の健康は本也

それから、健康の身體には、健康の精神が宿ると云ふ通りで、婦人であつても、身體が丈夫でなければ、良人を助くることも、強い子供を生むことも、育つることも、經濟も勞働も、何も彼も出来ませんから、若い中も、年とつてからも、體育衛生のことを疎にしないやうにしたいと思ひます。

勇猛精進せよ

以上いろいろのことを心に浮びたるまゝ、申しましたが、私の六十年の經驗としては、教育を施すには、種々なる方法もありますが、自ら正しからざれば、人を正すことは出来ぬ、口舌や文字に訴へるよりか、人格の感化が第一であると云ふことを大に信じますし、又、何事であれ、成功しようと思ふならば、百折不撓終始一貫、勇猛精進すると云ふことが、大切と思ひます。何事も一心でなければ出来ぬ。勇氣がなければならぬ。己に意を誠にし、勇猛なる精神を以て貫いて行つたならば、ご

んな家も治まり、どんな仕事も出来やうと思ひます。

幼時のお正月

生れたごきの跡見家

跡見家はもと、大阪木津の大庄屋でございしますが、私の生れました時は、もう庄家でもなく、家の財寶は悉く人手に渡して、氏神の牛頭天王や、大黒様の宮司まで横領されて仕舞つて居りましたから、大分困難な時でございました。一村の謀反の爲に命も取られる所を、家財道具を渡して命を貰つた様な譯で、父の此の難儀を委しく申しますには、言はないでも濟む人の名も云はなければなりませんから、たい庄家を罷めて、手習の師匠を初めた時分に、私が生れたと申せば分ります。姉も一人ございましたし、弟達も殖えて参りました、中々人形を抱いて遊ぶといふ譯には参りませんでした、と云ふものは、私が幼い時から、物覚えがよいと云ふので、父

や母が種々教へも致しましたし、自分も好きであつたと見えて、書を読んだり、字を書いたりして居る事が多く、又さうするものだと思つて居たのでございます。

先生兼小使

父の處へ習ひに參る弟子共は、九月からは百姓が暇になりますので、秋から正月へかけて百二十人計り、皆大人の農夫でございます。夜になりますと、此丈の弟子がそろ／＼習ひに參るのですが、父は逐一教へて居られませんでしたから、姉と私と二人で、代稽古を致します。習ふものは、名頭、屋號、畑の名杯で、假名も交つたお手本を見せては、何處と何處へ力を入れて、斯う引くのだと、字を逆に書いては、直して見せてやる。今日迄、私は學校で、生徒の見よい様に、さかさに立刀なんか書いて見せてやりますが、こんな小さな時分から、逆に書く事は慣れて居たのでございます。何でも暮六つから、八時頃までは、此の大人の字を直すのが役でございます。晝間午前中子供の弟子に、算術と、實語經、童子經、女大學、女

庭訓杯を教へまして、其の間には、弟の守も致します。夕方になりますと、油掃除をして燈心を揃へ、夜學の初る百疊計りの處へ、自在鍵を下げて土器を置き、其の兩方へ百姓達が坐つて、稽古の出来る様に、きちんとして置かねばなりません、毎日こんな風でしたから、別に何とも思ひませんで、何時も正月の八日の稽古初から、此の通りにして居りました。

正月の嘉例

と云つて別にございません、元日には弟子共が、年始に參りますから、三寶へ蓬萊山をいたしまして、熨斗と昆布をやるので、二日には讀初め、書き初め、三日、四日は、お寺へでも遊びに行つたり、五日の松囃の準備を致します。松囃には百二十人の弟子共に晝飯を出します。おひると申してもういらうをお肴にして、かきなます、おひらでもつけければ宜しいのですが、多勢ですから、中々忙しいのです。福引は、笹の枝につけて、お土産に出す位で、別に珍しい事もございませんで、八日に

稽古を初めますが、暮の内に、お書き初めの下書を教へたのは、中々骨でございました。

看板の揮毫

確か此の年でございました(女史十歳の時)父が、姉を伴れて、伊勢へ参りました留守に、近邊の酒屋から、酒の銘を大きな櫛の板に書いて呉れと頼まれました。龜の井といふ三字を両面へ書いて遣りましたが、未だに残て居るとか云ふ事です。あそこから又横物の額へ、矢張お酒の名や、其の他の商賣物を、五つ列べて書いて呉れと云はれまして、假名交りか何かで、龜の井、波の上、味りん、焼ちう、柳かげと書いたと覚えて居ります。書の師匠を取りましたのは、これから二年程後でございました。其の頃より今日迄、字を教へるといふ事は、一度も休んだ事はございません。幸ひ身體も壯健で、今日迄参りまして、別にこれといふ事を仕遂げたとも申せませんが、世に生れて参りましたからは、働くのが務めでございますと致しますれば、私

は私のつとめを、毎日して行かれますのと、別に悪いことをしないで行かれるのは幸福だと思つて居ります。

忘れぬ教訓

父の教訓

父が我れを誡めて額面に書いて、毎日暗誦させたる文は、下の文句でした勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。日月逝矣歲不我延。嗚呼老矣是誰之愆。即ち時間を大切にせよと云ふことでした。

母の教訓

母が我れに申し聞かせたる語は、道德仁義は人の食なり。これを得る時は、山中海底にも能く身を養ひ。これを失へば帝都金殿の中にも飢ゑ死にす。」と云ふのでございしました。私は、七十幾歳の今日まで、常に父母の此の訓誡を服膺して、父母なほ

在すが如く思つてをります。私は此の訓誡によつて常に勵まされ、教へられて参つたのでございます。

新春を迎へて

四十年來變りなき元旦

待たば遅く過ぐれば早きは、歳の瀬でございませぬ、私が大阪から出て参りましたは、未だ昨日のやうに思はれますが、數ふれば、最早四十年の昔になります。頭の雪と變るも覚えませんで、及ばすながら、教育を生命として過ぎて参りました。今日聖代の第四十三年の元旦を迎へまして、生徒一同と共に、又も楽しく嬉しくお屠蘇を祝ひ、お雑煮を戴くのでございませぬ。

私の元旦のしきたりは、四十年來毫も變りませぬ。寄宿生の多くは國に歸り、暖き兩親の膝下で歳を迎へますが、學校に越年する者もございまして、私は夫等の生徒

と共に、朝五時に起き出で、一同食堂に集り、お互に新年の喜びを申し合ひ、お雑煮を戴きますと、運動場に出まして、天皇皇后兩陛下の萬歳を唱へ、それから只今では、氷川神社に参詣を致します。歸れば年賀に來らるゝ方々に、御目に懸るといふ風に、毎年毎年同じ事を繰り返して居ります。二日には各宮様方に、年賀の御祝ひを申上げに参殿致しますのが、例になつて居ります。

若い時の嬉しいお正月

幼い折には、お正月程嬉しい時はございませぬ、只今でこそ、別に嬉しいとも存じませぬが、私も若い折には、指折り數へてお正月を待つたのでございませぬ。文久三年頃私の十六七の折に、大阪の中の島に居りましたが、暮の忙しさなどは忘れまして、只々楽しいお正月を待ちました。當時は歌の先生や俳諧の宗匠が、刷物と申すものを諸所に配りました。此れは奉書の紙などに立派な畫を書き、それに歌俳諧さては漢詩など、正月より十二月に至る、季節季節のものを書いたもので、只今

で申さば、柱曆のすつと氣の利いた物でございませぬ。其の刷物の畫やら、或は屏風、或は額面唐紙などの書を頼まれました、年の暮になりますと、碌々就眠む事も出来ぬ位、忙がしさに追はれましたが、大晦日には、愈々夫等を片付けまして、座敷の掃除も済ませ、夫れから除夜の釜をかけて、日頃のお朋友や親類の者を呼び、お茶を立て、静に歳を送るほど、楽しい事はございませぬでした。

恐ろしかつた正月

京の二條に居りました時、お正月の三日、只今で申さば新年宴會といふを、私宅で開きました折、姉小路の若君も、多勢の御家來をお連れになり、騎馬で來られました。夕方楽しく遊んで居りますと、ごどごどんと云ふ鐵砲の音が、頻に聞え出しました。それ戦争であると、四周は上を下への大騒動でございませぬ。これは皆様御存知の、伏見の戦争でございませぬ。翌四日には鳥羽で初まつたと云ふ騒ぎ、京都の町人は、皆逃げ仕度をする其の混雜は、お正月所の騒ぎではございませぬ。只今

とは違ひ、皆甲冑を着けて、生首を下げ、血刀を閃めかして往來を歩いて居るといふ有様、京都は天地も覆へらんとするやうで、街道を横る事も出来ぬ程でございませぬ。其の時私は二十四五歳、誠に恐いとは思ひましたが、これより王政古へに復り、正義が勝つ戦争と思へば、恐しい間にも心地よい事と存じました。

書き初めご女の書

一年の計は元旦にあるとか申して、總ての事歳の初めに、心を配り氣をしめて致さなければなりません。書き初めも、只年の初めに書くに云ふだけでは、何の意味もございませぬが、婦人と書道といふ上から、深く考へますと、最も大切に最も興趣のあるものでございませぬ。書は以て姓名を記するに足るなど、申して、男女ども餘り書に、重きを置かぬ風も見えますが、書は其の人の品性を現すもので、男女どもも忽せにすべきものではございませぬ。私の學校の特色とも申すべきは、裁縫と此の書でございませぬ。私は見合ひをする時、顔などを見るよりも、其の人の書い

たものを見れば、よく性質や氣象が分るから、書を忽せにしてはならぬと、折々生徒に申し聞かせて居ります。

私の書道観

名流婦人の筆跡など、申して、新聞や雑誌に出て居るのを見ますと、眞誠の勉強をしたのでなく、只見やう見眞似の字をしやなりぐなりと洒落書をしたのが、多い様に見受けますが、些の氣品も風韻もなく、誠に其の卑しげなるのには、驚く計りでございます。墨色を見て、其の人の未來を察すると云ふ易者もございますが、全く同じ墨で、同じ筆で書いた物でも、墨色の違ひますのは、誠に争はれぬものでございます。手紙を書くのに、鉛筆で走り書きをする貴婦人や、薄墨の字體も分らぬ洒落書きをする令嬢などを、往々見受けますが、楷書も行書も習はずに、行きなり草書を習ひます。習ふと申すよりは眞似るのですから、上手に出来る筈はございません。全體書を學ぶは、成るべく氣品の高い、男らしいものを選ばなければなりません。

に、近來は只綺麗なすらく、とした女らしい字をのみ、習ふ風がございませぬ。如何にも立派で、花やかではあります、女が女らしい字を習へば、愈々益々女々しくなる計りで、風韻も氣品もあつたものではございませぬ。此の心を以て書き初めの紙に對しても、靜に心を落着けて、年の初の筆をとつて戴きたうございます。

花 に 對 し て

想起す天王寺邊の花

花蹊と云ふ號を用ゐましたのは、桃李物言はず、下自ら蹊をなすの所から取りましたので、今日では私の名に爲つて居ります。花と云ふと思ひ出すのは、大阪の天王寺で、道を忘れたときのことでありませぬ。師匠の家から歸る途すがら、天王寺の塔から大分東の方に、大層桃の花が咲いて居ます、其の花の下は、すつと菜の花の盛りでして、眼の届く限り、黄色と薄紅の花でした。誠にもう何處迄往つた

ら盡きるかと思ふ位でした。

うろついて人に怪まる

私は幼少の時から、花が大好きでした。偶々隣家は、大層牡丹を作つてありましたので、子供心に、あゝ、隣の子供になりたいと思つたことを、覚えて居る位でしたから、此の桃や菜の花を観ましては、直に歸る氣にもなれず、桃を彼方此方と観て歩いては、寫生しながら、初めは往つたり來たりして居りましたので、其の邊に居た百姓が、妙に思つたと見えて、「貴婦は、狐にでも化されたのではありませんか、先刻から同じ處をうろついて……」と注意して呉れました。思へば今より五十年前のことでしたから、婦人がスケッチブックなどを持つて、圖を取りて居るなど、思ふ譯もありません。私は唯百姓の親切を謝して「私は花を観て楽しんで居るのだ」と言ふ丈でした。

路に迷つて月を踏む

私は此のやうに、花の下を歩き、本に書いてある武陵桃源も、こんな處ではないか知らどか、彼處から觀た此の花は、どうであらうかなどと、興に乗して、先へ先へに參りますので、とうとう天王寺の塔を見失つて、一寸歸路に困りました。大概は彼の高い塔を目的にして歸つて來られるのですが、其の時には、どうしても見つからないので、人の影を見ては聞いて、やつと元の處に戻つて、月を踏んで、家に歸つたのでした。今日でも、そんな所があるなら、夜まで歩いて居るでせう。

私の花見と其の心地

近來は、毎年櫻を見に參ります。前日から車を申しつけて置いて、朝の四時頃から、宅を出ますと、向島の植半あたりで、朝日の昇るのが見られます。朝日に向ふ櫻の花の、露を含んだ姿、未だ塵を被らない色の美しさは、口や筆で、表すことは難うございます。私が畫を描きますには、矢張花では、櫻が大好きだと云ふものは、實に此の朝の花に對する心地の、何とも清く貴く思はるゝからであります。

花も人の如く違ふ

花は恰も人のやうであります。美しい中にも、性に因つて趣が違ひ、香がまちまちであり、また見所は、何の價もないやうで居て、話をして居る内には、段々と其の人の徳が顯れて來ると、同じことでもあります。又の花の性が、桃の花の田舎娘の如き、櫻の花の上品として、御殿の緋袴姿のやうに思へる所、梅の匂が高く、幹のくねつて居る所など文人墨客めいてる所なども、面白いと思ひます。

思出のまゝ

私の祖先ご覺悟

何處も開け行く御代の有り難さ、昔とは事變りまして、今では何處この山村僻地と云へど、教育の及ばぬ所はありませぬ。私共老人は七十年前の昔を顧みますと、文

明の風潮の斯くまで流れ早いのを思ひて、轉た隔世の感に堪へませぬ。私の祖先は聖徳太子に事へまして、三將軍の一人と云はれました跡見一位と申しますので、大阪は西成郡の木津と申す所に居りました。私が天保十一年子の歳に、其處で生れま

すまで。此の木津に住つて居りました。私の生れましたのは。丁度大鹽平八郎の騒亂の後であります、當時跡見の家運は、衰微に傾きつゝありました。私には姉が一人に弟が二人、妹が三人ありまして、七人兄弟であります。父は能書家と云はれた程、中々書には巧で、私も六つ七つの折から、書を書く事が、大層好きでありまして、父の傍に居ては、何時字ばかり書いて居りました。父も私を大層愛しますし、人々からも譽められますので、子供心にも嬉しく熱心に勉強を致しました。父は私を膝元に呼寄せましては、跡見の家の衰へたのを話し、再興の事に就いて、心を悩まして居りました。私も女乍ら、どうかして跡見の家運を挽回して、父は固より一家の人々に安心をさせ、祖先の名を耻しめぬ様しなければな

らぬと、深く心に思ひました。

勉めて習つたり教つへり

當時は諸處から字を書く事を頼まれ、又教へて貰ひたいと申込まれて、私は毎日忙しく暮して居りました。私は未だ七つか八つの少女、自分が人から教へらるゝ年頃でありますのに、人に教へるなど、は、よく／＼教育者たる天性を持つて生れ出でたのでありませう。人には教へ乍らも、私は父に就いて習ひまして、暇さへあれば勉強を致しました。

私は書が好きである計りでなく、書も習ひたく、父に乞ひまして、十二の時から書を習ひ出しました。只今ならば上野の動物園に参りまして、或は展覽會を觀ましても、参考となる可きもの、手本となる可き者は、澤山あります。當時は良い手本や、モデルを得ようとするには、中々困難で、私はよく住吉まで、孔雀の寫生に参りました。

唯跡見家の再興のみ

私はかく自ら勉強し又人にも教へつゝ、暫く大阪に居りましたが、私は常時跡見家の再興と云ふ事が心にありまして、女ながらも、一藝に長じて身を立てようと思ひ定めました。それにはどうしても、京都に出て、然るべき師に就かなければならぬと考へ、父に乞ひまして、京都に出る事になりました。女の身として他家に嫁入もせず、藝で身を立てようと致す事などは、婦人の本分として、決して譽む可き事ではありませぬ。私も此の道理を知らぬではありませぬが、跡見家の再興と云ふ一大責任を持つた私の境遇、上、どうしても、嫁に行く事は出来なかつたのであります

生徒ご先生

私が京都に出ます時は、木津から移つて中の島に居りました。其の時には三十名程の生徒がありまして、どうしても私と別れるのがいやだと申して、涙を流して止められました。私には、私も誠に困り、つひ泣かされました。京都にては山陽先生の門人の

宮原節庵に漢學を、榎野楚山と云ふ僧に書を習ひました。京都でも同じく、自分で勉強をし乍ら、人にも教へまして、三十二歳まで留つて居りました。

東京に出で驚く

東京に出ましたのが明治三年の暮で、一時築地に落ち着きました。扱て京都から東京に来て見ますと、風俗が如何にも卑しく、婦人の美德などは、更に見出す事は出来ません、活氣には富んで居りますやうなもの。如何にも殺伐でございました。此れは明治の初めでございませぬから、戦争後の故かも知れませんが、京都から出て参りました方々は、何れも驚かれました。此の時でありませぬ、奥原晴湖様は、朝日の昇るやうの勢で、盛に書を描かれて、人々から持て囃されて居られました。

書畫よりか教育にて

私は其の時までは、教育者となるよりは、書畫を以て一身を立てようと思つて居

りましたが、此の有様を見て、女子教育の忽にすべきでない、深く心に定めました。築地から神田の小川町に移りました時は、中山、土御門、萬里小路、山内其の他諸處の姫様方をお預り致しました。此の時は只今の學校と云ふよりは、家庭教育に近い方でありまして、朝から晩まで、總て家庭的に教育致して居りました。明治五年頃三崎町に移りました折は、生徒も段々殖えまして、五十名程ありました。

跡見女學校の經營

明治八年には猿樂町に移りまして、跡見女學校と云ふ名を附けました。此れが只今の跡見女學校であります。當時は竹橋女學校がありました計りで、女學校は他に一つもありませんでした。さて學校は出来ましたが、經營と云ふ事に就いては、只今のやうに、寄附金で維持するなご云ふことは知りませぬし、又私は此方から誰方にも、決して令嬢をお世話したいなご申した事はございませぬでしたが、幸に高貴の方々のお姫様方が多く來られましたし、其の上又私は、潤筆料が取れますので、

左程に困難も致しませんでした。此の時には、よく生徒を伴れて 皇后陛下の御前に出まして、繪や書を書いて御覽に入れました。

お世話した高貴の方々

明治九年には只今の閑院宮妃殿下、當時はまだお五歳の三條智恵子様を、お世話を致すことになりました。大層大惻發で、特にお繪がお上手でありました。お十六で優等の御成績で御卒業になりましたが、御在校中は諸處から、書や繪をお頼まれになりまして、中々お忙がしうございました。此の時分には私は土曜から日曜に懸けて、泊りがけに宮内省に参り、お局方に教授を致して居りました。夫れから只今の小石川柳町に移りましたのは明治二十年で、其の後、閑院の三女王殿下もお世話しました。

開校式この三女王殿下

只今の小石川柳町に移りましたのは、明治二十年で、當時は周圍には民家もなく

空地ばかりでございました。此の移轉開校式には、伏見宮殿下同妃殿下、有栖川宮殿下同妃殿下、小松宮殿下同妃殿下を始め奉りまして、高位顯官の方々、宮中の女官の方々もお出で下さいまして、三條太政大臣が祝文をお讀み下さいました。恐く未曾有の盛況を極めた開校式で、私は身に餘る光榮に、轉た感泣致しました。從來二十有餘年、年毎に生徒も殖えて参りますのは、是れ亦喜ばしう思ふ所であります。取分け只今は閑院宮様の恭子、茂子、季子の三姫様をお預り致しまして、お世話を致して居りますのは、母宮殿下の御幼時も思ひ出でられまして、老いの身の唯身に餘ることでございます。殊に三姫様とも御熱心に御勉強遊ばして、御優等の御成績であらせられますのは、及ばず乍ら御教育を申し上げる身に取つては、甲斐あることと、此の上の喜びはございません。

恭子女王殿下は、最初ある學校に御入學遊ばしたのでしたが、或時其の教師を御殿に御招きになりまして、御饗饌を給はりました所、其の教師が如何にも、禮儀作

法を辨へぬ所から、兩殿下も大層お呆れになりましたして、彼のやうな者を、姫につけて置いてはの思召から、急に其の學校をお止めになり、私をお召に成りまして、「頼む」この仰でございました。併し私の學校には、小學部の設けもありません上に、果して此の任を全うし得るや否やも懸念致しまして、御辭退致しましたが、花蹊の手許でも良いから、教へて呉れと云ふ、重ねての仰せでありましたので、お受けを致し、小學部を置いて、御教授申上ぐることに致したのであります。前にし申し上げました通り、私は生れ落ちるから、教育者と生れましたやうで、今年七十二の老體となるまで、斯の如く教育に従事して参りました。今後幾年の壽命を、天は私に貸して下さるか知りませんが、死ぬ迄は私の天職に盡したいと思つて居ります。 (明治四十四年)

書畫修業の話

好きこそ物の上手なれ

書畫の道は、私も天性嗜好する處でありましたから、幼少の時より今に至る迄、多年の間、研究して参りましたが、之に上達すると云ふことは、中々容易でありません。けれども、本當に好きでやるなれば趣味もあり、又研究しつゝある間には、段々上手になるものであります

書は心の印也

書を學ぶの心得と申しては、一口にも言へますまいが、先づ極く簡單に述べませうなれば、古來書道に就いては、色々の議論もあります。私は其等の書論をも見、又年來の實驗に照して見ますに、書を正しく書くには、どうしても心から正しくせなければなりません。心が正しくなければ、決して書は、正しく出来るものではありません。即ち心の正しきも、歪めるも、其れは皆書に顯はれて來るのであります。心正しからざれば、書も亦正しからずとは、どうしても争はれない、昔から書道の人

人が、書は心印なりと申して居るのは、よく言つたものです、ですから色々の書論もありませんけれども、要は精神を正しく持つがよいと云ふ一點に歸するのであると私は信ずる、そこで心を正しくして、正しい書を書くこと云ふことは、書を學ぶものの、第一の用意です。

王羲之の法帖に依れよ

借一般の人々が書を學ぶの根本としては、王羲之でせう、他の人は善い處もあれば癖もありますが、羲之の書には癖がありません。さうして此の正しいと云ふ處は、殆ど學び難いものである。故に羲之を習ふには、先づ其の精神から眞似てかゝらねばなりません、只其の書風のみを眞似ようと思つたとして、到底羲之の様な書が出来ないものでない。昔し蘇東坡が羲之の書を好み、熱心に習ふたけれど、どうも旨く行かない、所が其の母が注意して、羲之は書が上手なばかりでなく、所謂精神を以て勝つた人であるから、お前などが幾ら羲之を習つたとして、とても出来るもので

ない、一層自分の流儀でも始むるがよいと言つたので、東坡は大に其の言に感じ、爾來及び難き羲之を廢めて、自己流の書風を始めやうと努めた話がある、といふやうなものです。私等も天性、書が好きで、色々な法帖も習つて見ましたが、どうも王羲之が好いので、つひ之に私淑する様になりました、つまり私も之を習つた一人です。けれども、東坡の如き奇才でさへ、習つて出来なかつたのを、我々如きものが出来よう筈はなし、矢張或點迄は習ひましたが、廢めて後は、自家の書風を立てる様にと努めて居ります。けれども羲之に依つて得た所は、決して少くないと思ひます、羲之の法帖には實に立派なものがあります。

私の繪畫は何流か

次に私が書を學んだことを、一言申ませう、私は始めに圓山風の書を習ひました、之が即ち寫生派で、言はゞ實物の形體、其儘を寫し取る様なものであります、南宗派を習ひましたが、南宗は別に文人派と申しまして、言はゞ氣韻や風格を表す

もので、寫生書とは餘程違ふのです。私は此の二派を習ひましたが、頑固一方に偏するのには、どうも面白くないから、今では此の二派を折衷して、書に於けるが如く矢張自己流にやつて居ります。私は書も好きですから、描いたのも随分あります。

私の無病長壽法

必ず遣り通す覺悟で

私が此の齡を保つことの出来ましたのは、別に世間の人と變つたことをしたのでございませぬ。只物事は徹底しなければならぬと云ふ意味から、一度遣り始めました事は、必ず最後まで貫徹しやうと云ふ心懸で、殊に冷水摩擦及び其他の康康法は、如何なる故障がありません。一日も欠かせた事がありません。ですから其の意思の力と、生來の強健な身體と相俟つて、今日かうして無事に暮らして居る次第でございます。

毎朝祖先の墓地へ

先づ朝は五時に離床致します、而して冷水摩擦を三四回繰り返しまして、それから自身で髪を上げます、老人の事でもありますから、多くもない髪ではありますが見苦しく散りこぼれないやうに、油で固めて結びあげる事があります。之れは如何なる場合でも、必ず自身で結びあげる永い習慣を、只一度も破らぬやうに心がけてをります。髪をあげてから衣服を改めまして、先づ近所を散歩致します。而して此の學校の背後にあります光圓寺と申す、銀杏の寺の墓地へ參詣致します。其處には私共父母から祖先の方々の石碑もありますので、是れのみを毎朝欠かさず參詣致します。歸途もふらぶら静寂な朝の町中を歩きますはつて、頓て歸つて参りますと、七時近くなります。而して朝餉に向ひまして、教室へ出ます頃には、八時近くなつてをります。

平常の食事と飲料

朝の食事は、鶏卵の半熟に、おみお汁と、御飯とでございませうが、晝は家人の誰人もが、喰べますものと同様の惣菜に、半斤のパンを頂きます。パンは焼き又は其の儘に致す事もあり、別にパンを付けること定めても居りません、夜も之と同様の食事を取ります。

其間には間食は断じて致さないやうにして居りますが、茶の代りに、黒豆と黒米とを煮出したる汁を飲むやうに致して居ります。此れは故人石塚左玄氏から教へられたもので、非常な滋養分を含んで居ると云ふ事で、永く之れを服用致して居ります。食物に好悪をつけない性分で、何なりとも有るに任せて頂きます。少しも贅澤に致す事もなく、選り好みも致しません。若年の頃から、齒痛の記憶すら持たないと云ふ風な、健康状態でございますから、少しは固形物でも、平氣で喰べつけて居ります。

静座法のお蔭で寒さ知らず

入浴は冬季は隔日で、夏季は毎日に致して居りますが、此れには別に時間の定めもありません。丁度今より三年前から、岡田式静座法を始めまして、三年間申すものは、車の上でも電車の中でも、人と對坐する間でも、如何なる場合でも、必ず間断なく遣つてをります。従つて全身は、温味に包まれて居るやうです。殊に風邪を引く隙間もないと申す譯であります。就眠は十時と定めて居りますが、寢床で讀書をする習慣がありますので、冬は書物を持つ手の腕が寒くて、よく風邪を引く時のやうな心地を覺えましたが、岡田式静座法を行ふやうになつて以後は、斯かる憂ひもなく、誠に温かに感じるやうになりました。冬季も若年の頃と同様に、餘り寒さを感じませんので、最も嚴寒の頃と雖も、二枚の綿入以外は、僅に薄綿入の羽織を用ゐる位の事で、其餘分に、眞綿をつけたりなどは致しません。

若い時は十六貫の體量

健康な上にも健康でありたいのは、人情の自然であります。此の健康を保つ

は、只單に外面的の攝生法では、矢張り目は少いやうであります。其處には、剛健な精神修養なるものが、肝要であらうと思ひます。元來私はすこやかな生れつきではありましたが、四歳の時には疱瘡も致しましたし、十七八歳の時には、流行の麻疹にも罹りました。只の二回ではありますが、可なり重患の方でもありましたので、怯弱な癖がつけばつかないものではないのですが、其の後は自分一個の意思の力で、再び病氣にかゝらないやう努めましたので、其れからは六根の何れにも何の故障も持ちません。

眼も耳も遠くなく、齒も強固で、記憶力も衰へてゐるやうには思ひません。只若年の頃には十六貫以上もあつた體量が、僅に十一貫以上に低落しましたのは、年老いたと申す唯一の證據だと思つてをります。

愉快に其の日其の日を

健康を保つて行く唯一の秘訣は、心持を爽快に持つて、物事をすべて樂觀する事

であります。心中快々として樂しますといふ事は、身體に忽ち影響する基で、如何なる難事に遭遇しても、必ず其の困難を自ら切り拓いて、進んで行くこと云ふ心懸が何より肝要であります。

幸に私は、多少の艱難に遭ひましても、自ら怯むと云ふ事を致しませんので、日常を愉快に消す事が出来ます、嬉しく樂しく、其の日を送ると云ふ此の信條が、今日の健康を保たしめました原因であらうと思ひます。

御前揮毫の光榮

昭憲皇太后陛下の女子教育に御心を注がせ給うたことは、其の數ある御詠草の中にも窺はれますが、私共もしばく御召に預り、身に餘る光榮を擔ひました。私の初めて拜謁致しましたのは、明治五年で、陛下は御廿三四で、申すも恐れ多い事ながら、誠に花も恥らう御姿であらせられました。未だ其の折に御洋装はなく、常に緋

のお袴に、御袿、御垂髪の清楚な御装束に拜しました。御前揮毫を仰せ付けられました折などは、僅かの女官方を召されて、御打解になり、いろ／＼下情に就いての御下問を遊ばすと云ふ風で、云はゞ誠に御氣輕の御方に在しました。そして奉伺の御は、豫め人数を申し述べよとの難有き仰せに畏みて、生徒等を伴れて參上致します時、幾日に幾人と云ふことを言上して置きますと、陛下には大抵紫の綺縮緬一反づ、袖流しを一人一人に、御下賜あらせられますので、私共は思はず感涙に咽びました。

日々の務め

朝の務と樂

私は散歩が好きでありますから、毎朝戸外に出ます。此の節は毎朝五時に起床して冷水摩擦なごします。女中などを起すのも本意ではありませんから、皆の起きない

間に、只一人出かけてまして、氣の向くまゝに、本郷から小石川のあたりを、ぶらぶら歩いて見ます。朝の散歩は大變氣持の好いもので、健康の爲にも少からず効があると思ひます。夏ならば、氣も殊の外すが／＼しく、春ならば、花は大好きでありますから、俵を言ひつけて置きまして、四時頃に起きて向島なんかに參ります、花の美しさは朝に限ります。日中になると塵が立つたり何かで、きたない花を見なければなりません、朝の間と云ふものは、それは／＼澄み渡つた、しつとりと沈着いた中に、生氣に満ちた花の色が浮き出て、丁度植半あたりで、朝日がさし昇る位にまゐりますと、實に、旭に匂ふ櫻のながめを、自分一人で占領してゐるかのやうで何とも云へない、いゝ氣持になります。

夜の務と樂

日の永いときは、晝間十分働ければ、夜は全く身心を養ひ、休むばかりであります、それでも、人の世話とか訪問とか、神佛を祈るとか何かとあります。それが

すんで身體を自由を持ち、心地よく寢所に入るのは、凡午後九時であります。人は人の爲に祈るとか謀るとか云ふ陰の務も、仲々あるものであります。それをしなければ、人の務を全うするとは申されません。

いろくゝの養生

近頃は皆さんが、静坐法だとか、複式呼吸などを、大分御熱心のやうであります。私はいつも深呼吸を致して居ます。之も永い間致して居ますが、時間は定めて居ません。朝起きた時もやりますれば、寝がけにもいたしますし、その他暇さへあれば、絶えず厲行して居ます。殊に俚に乗りました時などは、必ず深呼吸を行つて居るのであります。齒の事につきましても、いろくゝ齒磨などが、澤山出来ましたが、私は何時も就寝ます時分に、鹽湯を枕許に置いて、そして朝それで、齒を磨きます。これが一番好いやうに思ひます。私はずつと、かうして參つて居りますが七十幾歳の今日迄、齒の痛みと云ふものは存じませんし、奥の齒が一枚抜けたいけ

で、未だ此の通り揃つて居ます。だから食事なども、西洋料理でも日本料理でも、皆様の召しあがるものは、何でも大抵食べますので、宅でも皆若い女中なんかと、同じものを食べて居ます。尤も朝は、殆ど食かないと申してもよい程、——只お味噌汁の中に卵子を一つ落しまして、それだけ食いて居ますが、其の他の二食は、何でも女中と皆同じものを食べて居ます。何方かと申せば、野菜ものを多くいただいた方が、身體のためにいゝやうであります。

書畫や教育が何より樂み

私は朝飯後急ぎの手紙や新聞などを見、毎朝八時から午後の三時頃まで、學校に出まして、親しく教鞭を執つて居ますので、是は一日一日眼には見えませんが、何かい出来て行くのでありますから、私に取りましては、無上の樂みであります。元來私は赤兒の時から、書や畫が好きだつたさうでありまして、泣いてる時分でも、書畫を見せさへすれば、直に泣き止む位だつたと申しますが、本當に筆を執つて書

きましたのは、四歳の時が初めだったのであります。又讀書も大變に好きでありまして、あの六歳の時だつたと申します。母方の祖母が死にまして、その葬式に行つての歸途、父親の脊に負はれ乍ら、孝經を誦讀しましたので、其の時は父は驚いたさうでございます。私も誦讀しようと思つて口ずさんだ譯でなく、好きで讀んで居たものですから、自然憶えてしまつたんでせうが。それから皆が、此の子は餘程本が好きだと見えるから、教へてやつたらよからうと申したんだと云ひます。

間斷なき教育事業

其の頃父は私塾を開いて居ましたが、農家の多い田舎の事で、夏は色々農事が忙しければ、九月頃になりますと、暇ですから、夜學が始まるのでございまして、百疊の廣い間に八十人ばかりが集つて來て、讀み書きの道を教はるのでした。そして私もほんの子供乍ら、父の手傳ひをして教へて居ましたが、今も思ひますのは字を逆さに書いて教へた事でありませう。即ち相對して居て、向に分るやうに、此方

から逆さに書いたものであります。だから今でも、逆さに書いても、ちつとも變りはありません。こんな風にして父の手助けをしました。十二歳の時、京都に修學に參りました。しますと私から求めもしないのに、華族様方から教へに來てくれたので、教へて貰ひたいのと、申込まれたのでございませう。それから明治三年でした、神田三崎町にまゐりましたが、そこでも又上流の方々から、御依頼を受けますので、到頭八年には仲猿樂町に學校を建てまして、其れも狭くなりましたので、廿年に只今の處に、新築致した次第でございます。かう云ふ風で間斷なく、殆ど六十年間と云ふものを教育事業に投じて來ました。

子はなくも教への孫は多い

毎度申しますやうに、私は母から『跡見の家を再興するのはお前だぞ』と云はれた言が、幼い時から、耳に残つて居ましたし、再興すると云つて、學問、書畫などを勵んで、天下に名をなす外はないと、その方の努力にのみ、意を集中しましたので

結婚などの事は、思ひつく間もありませんでした。従つて自分の子供を育てるやうな事もありませんし、只讀書と書畫と生徒を教育する事とが、何よりの樂でございます。もう私の教へましたもので、孫でも出來さうなのが、幾らもあります。先日熊谷から花見に来てくれと申しますから、一番古く寄宿舎に居たもの十四名を伴れて参りましたが、その來いと招んだ者も一番古い寄宿生で、一番若いのが四十歳と云ふんでございませう。それ等の者が集り合つて、昔話など致しまして、ほんとに樂しうございました。

活動是れ快樂

私は學校の仕事の外に揮毫をたのまれるのも、澤山遣りきれない程でございまして、暑中も生來休暇なごせず、随分忙しい身でございしますが、人間は働かねば駄目だと思ひます。私の經驗から申しまして、働いて身體を悪くする事はないのです。只心を痛めると申すのが、一番毒でございしますが、どんな幸福な境遇でも不滿ないと思へば、不滿いもの、つまり、氣の持ちやう、考へやうですから、色々の事をよくよしないで、その分に満足して、働くに限ると思つます。

私の幸福は清き活動なり

私は先に申しました養生法を守り、心に樂を有つて愉快に、毎日働きついで居ますから、別に勞れると申す事もなく、徒歩いても足が痛むと云ふではないし、耳が遠いとか、目が不自由だとかはなく、近頃少しは弱つたと思ひますが、未だこの年になつても、ごこと云つて悪い所もなく、肉體上にも健全で働いて居ます。若し私が世間並の御隠居様だつたら、屹度身體が悪いとか何とか申して、つまらない日を送るのだらうと思ひますと、私はつくづく今の身を有難いと思ひます。

暑中の生活

避暑の要なし

毎年夏になると、避暑の客は、海岸又は山邊に輻輳するであります。私は生來避暑などをしたことはございません。それは病氣であるとか、何か用事でもあれば、夏季の旅行も致さぬではありませんが、幸ひ此の年になつても、氣力が衰へず身體健康でございますから、態々轉地療養などする要を認めません、毎年自邸に於て、自由な私一流の生活をして居ります。

暑 中 の 一 日 間

夏は先づ曉氣人を襲ふ午前四時と云ふに、唯一人臥戸を出で、自ら門を明けて自邸（小石川柳町）の附近を一周して、散策に朝の清き空氣を吸ふこと、凡そ一時間許りにして歸ります。すると最早、居間の掃除も済み、朝飯の仕度も出来上らんとして居ります。それから朝飯を食へまして、午前中は、平素は學校があつて出来ませんから、暑中は、此の間に繪畫を描くことに費します。即ち此の午前中に、大切なる私の業務を済ませるのでございます。それから午後になりますと、種々の用

事を済ませたり、色々の書見を致したり、用事がなければ、極自由に日を暮します。次で夕飯後は打寛いで、晝間の残りのことをするとか、其他隠れたる用事など済ませ、庭園の樹木を渡る風に身體を和げ、心氣を爽快にして、午後十時に臥戸に入ることにして居ります。

隠れたる用事あり

此のやうでありますから、暑中だからと云つて、避暑どころか、用事は澤山あります。唯學校の授業がない爲、日頃しようと思つて出来ません繪畫など、描くことにして居るのでございます。又人には種々用事があるものでありまして、或は朝夕に神佛祖先を禮拜し、逝ける者は追善し、又は親族知人弟子達の身の上を心配すると云ふやうなことがありまして、閑に見えても、さう閑はありません。人様から頼まれて書畫の如きは、數知れぬ程ございまして、それは一生に出来るか出来ぬかは分りませんから、近頃は、一切人様の需に應ずることが出来ないことになつて居りま

す。要するに、暑中は、山水の美に接し、自然の氣を殊更受けなくても、自分の邸内で比較的自由的な生活をし、志氣を養ひ、日常出来ない仕事を果すことにして居るのでございます。

朝夕の禮拜

私の朝夕の禮拜と申すは、朝起きて顔洗ひ口嗽ぎましたら、身心を正しうして、神棚に向ひ、畏くも、皇祖天照大神、兩陛下を御始め、明治天皇、昭憲皇太后様にお稔を上げます。又夕には佛壇に向つて、如來様を禮拜し、祖先知己の靈を祭ります。新に亡くなつた人に對しては、五十日間の讀經念佛を怠りません。有縁の人の命日には、必ず供華、焼香、燈明を捧ぐるは勿論、お念佛を致します。一萬遍のお念佛を、譯はなく稱へることがございます。此のやうな、自分丈の用事は、澤山あるのでございます。

心を主とす

是れに就いて想ひ起すのは、近來の人は、神佛などはどうでも宜い。目前の利益さへ得ることが出来れば、構はないと云ふので、人心が頗る浮薄となり、危険となりました。それでは神も佛もないやうであります。所謂天網恢々疎にして洩さず、近來各方面に改革が行はれつゝあります。實に慶賀の至りであります。悪い人は、ごしく淘汰されて、善い人が更つて行きたいものです。かゝる傾向は、どこ迄もあつて欲しいと思ひます。夏日の暑熱と云ひましても、心さへ仰いで天に慚ぢず、俯して地に愧ぢないと云ふやうに、一點の蟠屈、煩惱がなかつたら、これが一番涼しいことゝ存じまして、私共は不肖ながら、心氣の靜養を主として、殊更轉地など致しませんのでございます。

第四編 時局の巻

今後の日本婦人

婦人は齊家を主とす

婦人としては、先づ幼にして父母に事へ、嫁して夫を助け、舅姑に仕へ、子供を育て、家庭の諸事に任じ、尙餘力あらば慈善公共の事に盡さねばなりません。此れに就て、最も思はねばならぬことは、家を齊へると云ふことであります。家を齊へることを主眼とし、之を修養して行つたならば、婦人の種々の務めは、期せずして自から出来るやうにならうと思ひます。私共は多くの女弟子に對つて、さう申して居りますのでありますが、家庭教育としても、今後とて此の如きことを、主に躰けたいと存じます。

財政の整理を急ぐ

婦人の本務は、仲々男子に譲らぬ程ありまして、其の責任も重いのでありますが明治は大正となり、國運の發展と共に、婦人の責務も、益々重くなつて参りました殊に廣く國家の形勢を観察しますと、種々憂ふべきこともあるやうであります。其の最も苟且に出来ない目前の急務は、財政を整理することであらうと存じます。國家の財政の整理は、即ち各家庭の財政の整理でありますから、私共婦人として、老若を問はず、こゝに注目して、今日よりは一層勉強努力したいと存じます。如何に智識は發達し、外界の文明は進歩しても、財政に失敗しては、何事も出来ません婦人の大切なる勤務たる家を齊ふることも、到底出来まいと存じます。

現代婦人の弊は是れ

眞面目になれ、忠實になれ、能く勤勞せよ、能く儉約せよとは、畏くも教育勅語、戊申詔書等に宣はせてありますが、どうも、言ふべくして行ひ難きは、勤儉の

二字であります、幾ら男子の方が、努力しても、他の半数の三千萬の婦人にして、ほんやりして居たならば、如何とも致し方がなからうと存じます。幼くしては父母に強請り、嫁しては良人に強請り、老いては、子息に強請つて、美しい衣服を着よう、立派な装飾をしたいと、徒に流行を追うて、底止する所を知らないやうでは實に家を齊へる所か、國家の前途も危からうと存じます。

婦人の奢侈と經濟戰の敗北

申す迄もなく、國家は内外二十億の借金に苦められて居りますのに、國民の奢侈殊に婦人の贅澤は、亦極點に達して居るやうであります。此の如きは、婦人が國家を滅すことになりすから、今後の婦人は、餘程覺悟して、今後の家事經濟に當らねばなるまいと存じます。世に富國強兵と申しますが、我が國は遺憾ながら御承知の通り、富國と云ふことはありません。然らば強兵であるかと云ふに、兵は或程度は、今日迄強かつたやうでありますが、此れは干戈の戰爭のみで、商戰即ち商賣

の競争では、始終負けを取つて居るやうであります。こんなことで、どうして國家が立つて行きませう、將來の婦人は、能く此の邊に氣を付けて、勤勞して行かねばなるまいと存じます。

中流以上の婦人に望む

此れに就いて、私の平素考へて居りますことは、中から上の婦人諸君が、殊に一層奮發なさらねばなるまいと思ひます。何でも令嬢らしく、或は奥様らしく構へて骨打なごせず、身分があると云つて、勤勞を避けると云ふのは、善くないこと、存じます。西洋あたりでは、女王、王妃の貴きにありながら、裁縫、手工、美術に親んで居らつしやると云ふことを聞いて居りますが、日本でも、中流以上の奥様は、時間の餘裕も多いのでありませうから、此の時間を利用して、何か内職をなされたいと存じます。少し金が出来ると働かない、少し年が寄ると、隠居すると云ふことは、面白からぬことと存じます。中流以下の婦人は、餘儀なく内職なさる方もあ

るやうであります。中流以上の婦人の、年中暇で暮さるゝ方の少くないのは、遺憾のことであります。お金あり地位あり、年をつた婦人が、勤勞なさる位ならば、中流以下の婦人は、あの方でさへ云つて、骨折らぬ人も骨折るやうになり、已に勤勞する人は、益々勤勞するやうにならうと思ひます。

内職して輸出したし

然らば、どんな内職が宜しいかと云ふに、それは何でも宜しいのであります。御自分で出来ることを、何でもなされば宜しいと存じます。私は繪畫を致しますが、彼の絹張の團扇とか、扇ごとに繪を描くなど云ふとも宜しからうと思ひます。一體日本婦人の手先は、外國人などは違つて、非常に器用であると云はれて居りますから、此の手先を以て、各自、何かなさつたなら、相當のものが出来ませう。而して成るべく外國に輸出するやうに致したいと思ひます。外國から輸入したものは、成る丈け遣はないで、此等のものを、ごしく輸出したならば、どの位國家の爲にな

るかも知れません。故徳川慶喜公の奥方は、非常に器用な方で、美術、刺繡、種々な女藝に達せられて居られますが、實に惜しいことと存じます。貴族富豪の夫人にして、内職を卑しとせず、却つて名譽としてお働きになつたら、どの位、財政を助けるかも知れませぬ。

内職すれば儉約となる

世には子供も多くある、交際も廣い、家事が忙しい、さう手内職などする閑がないと仰る方もあるやうであります。如何に忙しくとも、仕事の秩序を良くし、一生懸命になさつたら、夜間子供衆のお休みになつてからなど、多少の暇はあらうと思ひます。已に多少の餘裕があつて、腕をお磨きになつた方なら、日に一圓位の内職は出来ようと思ひます。假ひ一圓でも、五十錢でも、内職なさるとしたならば、只にそれ丈、一家の經濟を補はるゝのみならず、お金の味が分りますから、婦人に有勝な、贅澤をする、餘計なものを買ふと云ふことがなくなり、自ら完全なる家